
白銀、光臨(あらわ)る

ヴォルティス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀、光臨あらいびる

【Nコード】

N8875U

【作者名】

ヴォルティス

【あらすじ】

それは唐突に訪れた。天使！？異世界！？それに魔法だつて！？マジかよ……………。

最初に出会うのは凄く強い青髪の美人さん……………ではなく魔物！？本当に色々な生き物があるんだなあ……………。なんか獣人もいるし…………。はあ俺この世界でやってけるのかな？

処女作です。なお、この作品には、主人公最強、異世界トリップ、ハーレム等の要素が含まれます。この系統が嫌いな方はブラウザバツクをお勧めします。最近は最強要素が強め、ハーレム要素が弱

め?になってきたので、イチャラブを頑張って増やそうと思います。

プロローグ（前書き）

ヴォルティスでございます。

初投稿ですので生暖かい目で見守ってください。

プロローグ

～日常

… 月×日

日にちを言ったところで変わらない。
いつもと同じ日常。

生まれてからこれまで、大きな、人生を変える様な出来事は起こらずに過ごしてきた。

普通に生まれ、普通に育ち、普通に遊び、普通に勉強をする…。

そんな何の代わり映えもない、どこにでもあるような、典型的な人生を送ってきた。

そして今も普通に登校中である。

今の季節は四季でいう【夏】にあたる。

まあ何が言いたいのかというところ…

「暑い…」

そう暑いのだ。

マジ暑いめっちゃ暑いギガ暑いテラ暑い(r y

…しつこかったようだ。

「しかしマジでありえんな、この暑さ…。40 超えてんじゃね？」
そついや自己紹介をしていなかったな。

俺の名前はかがりびりょう篝日掠。

16歳のバリバリ現役高校生だ。

身長は175センチ、体重56キロ

平均的な至って普通の体つきだと思っ…

「ってなんで俺はこんなこと考えてんだ？…まあ深く突っ込んではいけない気がするからほっとこっ」

こんな感じでいつも生きている。

今日も普通に過ごすのだと思っていた…。

あんなことが起こる前までは。

プロローグ（後書き）

こんな感じでいいんですかね…

全然わかんねえww

何かアドバイスなどがあればお願いします。

プロローグ2 (前書き)

ヤバイすごく短い。

プロローグ2

く邂逅？

ご機嫌やう、皆さん。

思わず古語を使ってしまふほど焦っている篝曰掠だ。
何故に焦っているかだつて？

そりゃあ…

「幼女が行き倒れみたいに倒れてたらなあ…」

うん、そゆこと。

俺の目の前に幼女がうつ伏せで倒れている。

「どうしたもんか…」

- 1、お持ち帰り
- 2、殴るor蹴る
- 3、爽やかに起こす
- 4、スルー

「何故一番最初がお持ち帰りなんだよ！犯罪者みたいじゃねえか！
2も無いな…。3…爽やかに起こすってどんな起こし方？4が一番
無難だが…見捨てるのはなあ…。やっぱ3？よし、爽やかな部分を
取って普通に起こそう。」

決定。そして実行。

「あの〜もしもし？生きてますか〜？」

なんで幼女相手に敬語使ってるの俺…。

まあいいや。さっさと起こそう。

ゆさゆさ

「おい。ほんとに大丈夫か〜？起きろ〜」

揺さぶりながら起こしてみる。

「しっし…しっしん…」

あ、起きた…

プロローグ2（後書き）

すみません。

なんか短いですね…。

プロローグ3 (前書き)

プロローグが多いって？

すみません、作者もそう思ってます…。

プロローグ3

「急展開!？」

「おい、大丈夫か？」

「え…あれ?なんで私こんなところに…。ってそれよりも、あなた誰ですか？」

「(幼いのに流暢に喋るな…)…いろいろと言いたいことがあるがこれだけは言わせてもらおう。それは俺のセリフだ!」

「まあそれもそうですね。自己紹介もせずに…私としたことが…ブツツ…」

「考え事は後にしてくれ。それで、君の名前は?あとなんで道端に倒れてたんだ?」

「ああすいません!えっと、私の名前はマリアと言います。なんであの場所に倒れていたか…ですが…非常に言いにくいんですけど…天界から落ちてしましまして…/ / /」

何言っちゃってんの?」の子…。

この歳でそういう道に目覚めてしまったというのか!？」

「…んで?なんで落ちちゃったわけ?」

「えっとですなえ……んでしまって…ボソボソ」

「ん？」

「くっ！転んで落ちちゃったんです！／＼／」

「（かわいいなあ〜）そうかそうか、そりゃ大変だったな〜（ナデナデ）」

「なっなんで撫でるんですか！／＼／」

「いやいや苦労したんだなって思ってWWW」

「嘘だと思ってるでしょう！ほんとなのに〜〜〜！」

タッタッタッタ……

「行ってしまった…。大丈夫かな？あの子…（特に頭が…）」

お、早く行かないと朝礼が始まってしまっな…。

「行きますか…。」

「ん？なんだこれ？」

なんかあの幼女が倒れてたところに黒い穴が…。

「…こんなもんなかったはずだよな？しかも深い…。こんなもん、一日や二日じゃできない…。どこまであるんだ？」

このときほど、自分の好奇心を恨んだことはなかった…。

プロローグ3(後書き)

やべwww

プロローグがもう一個続いちまうwww

プロローグ4（前書き）

すみませんww

マジですいませんww

短い上にプロローグ四個とかなに考えてるんでしょうねwwww

プロローグ 4

「こんなことってありえるの!？」

とりあえず…石入れてみよう。

「そおい!」

ひゅっううううん……

「そこに着く音がしねえ…」

なにこの穴…。

「うん…。絶対おかしいよなあこの穴…」

ちょっと危ないけど覗いてみるか。

「よう…」

「おっはようぞろ!」

「うおっ!?!? ちょ、まスルッむひゃっはあああああ…!?!?」

「…アレ?」

マジかあああああああ!?!?

「ふうん…（それよりも年上つてことに驚いた…）」

「とりあえず、今自分が置かれている状況を理解できますか？」

「ああ大体はわかってる。つうかこの後の展開がわかる気がする…」

「ならば好都合です。簡潔に言うと今あなたは死んだことになっています。あの穴は…まあ私が下界に落ちたことにより生じた世界のずれ…とでも言いましょうか。あの穴は下界と天界を結ぶトンネルととってもらって構いません。あなたはそれに落ちたことにより世界から存在が消え、世界に死んだと認識されました。しかしまだあなたには寿命が残っています。よって元の世界には戻せませんが、別世界で残りの寿命を消費してもらいます」

「やつぱり…。まあ元の世界に悔いなんてないからいいんだけどね」

「あれ？意外とすんなり受け入れられましたね。ますます好都合です」

まあ恋人なんてのもいねえし友達もさつき話しかけてきたやつくらいだし…。

それに…両親もいないしな。

「それで、今回の事件は完全にこちらに非があるので願いを一つ叶えてから別世界にお送りします」

「ふうん…。んじゃあ努力の才をくれないか？」

「へっ？そんなんでいいんですか？」

「ああ。元の世界では努力することが一番苦手だったからな。まあ努力さえすりゃ大概のことはできるだろうし」

「そうですか…。では《努力の才》を付加して別世界に送らせていただきます（これではこっちが納得できないので…色々付加させていただきますよ）」

目の前に光のドアのようなものが出てきた…。

「それでは、良い人生を」

「ああ、じゃあな」

ドアをくぐったら視界が真っ白になり、俺は気を失った……。

プロローグ4（後書き）

やっと…やっと始めれる…！

1話 異世界へ(前書き)

おはこんばんちわヴォルティスでございます。

やっところさ本編入りですWWW

どうぞお楽しみください。

1話 異世界へ

「森、盛り、漏り!？」

「ううん…ハッ!?!……………ここどこぞ?」

俺が気がついて最初に目にしたのは、木木木本木と見事なまでの木の隊列…

「ん?なんか変なもんが混ざってんな…」

リヨウ 八本 ヲ 手二入レタ!

…ドラ エじゃないんだから。

「真新しい本だな…。しかも薄い…。ええ…つとなになにに…“異世界へ行った哀れなあなたへ”…俺のことだろコレ。哀れって…」

ペラッ…

「つと…“すみません、さっきのタイトルは頭が残念な先輩に勝手に書かれました”…あいつが書いた訳じゃなかったのか。つか意外に毒舌キャラだったのな…あの幼女…“たぶんこの書物を見ておられると思いますので軽くこの世界についてとあなたの能力について触れておきます”おお、ありがてえ…俺の能力…か才能は努力じゃなかったっけ? “まずこの世界に名はありません。そのかわり世界の約六割を占める大陸がクイデリアこの世界の名のようなものになっています。このクイデリアはいくつもの国に分かれており(略)…そし

てあなたの能力についてですが、あなたはあまりにも欲がなかった
ので勝手に色々付加させていたいただきました”…マジか”

次回主人公の能力が明らかに！

1話 異世界へ(後書き)

やはりPSPで書くには限界があったか…。

ほんとに能力書きたかったんですけど、あえなく文字制限に引っかかりました。

次回、はりきって書きますので楽しみにしてください。

2話 旅立ち…？（前書き）

やっとこさ主人公の能力解明です。

今回は長めに書けました。

それではお楽しみください。

2話 旅立ち…？

「俺のチカラ！？」

俺の知らない俺の能力…なんなんだろう…？

「あなたには《努力の才》の他に、《光適正》《魔力最大》《身体能力強化》《物質変化》《天使の加護》以上の能力を付加させていただきます” 魔力最大と身体能力強化はわかるが…光適正と物質変化ってなんだろうか…” 光適正…これは所謂光魔法に適正が出るというものです。この世界に光属性の魔法を使える人はいないのであなただけの能力になります。魔力最大…これは体の成長と共に魔力が多くなる、というものです。努力すれば最大値は増えるので努力の才と併用して頑張ってください。あと魔力を使用してもすぐに最大まで回復します。身体能力強化…これはそのまんまですね。まあ武術を極めた達人と同等かそれ以上の身体能力だと思って下さい。なおこれも鍛えれば上がりますので併用して頑張ってください。物質変化ですが…まあ切り札と言っても良いんじゃないでしょうか。これもあなたの固有能力です。名前の通り、物質を自分の好きなように変化させることができます。たとえば光や炎を固体化させたり、魔法を使わず水を空气中で操ったりと色々応用が利きますので試してみてください。最後に天使の加護ですが…これは回復の補助や若干の能力向上などです。以上があなたに付加させていただいた能力です。あと特典でこの世界の言語を話すことができるようにしました。この力を駆使して頑張ってください”…」

あの幼女は俺を人外にしようとしても…？身体能力…おかしいだろ…基準が…。しかもなんですか？この世界には魔法なんていうファン

タジーなものが存在すると？そういう肝心のことを教えるよ…。

「ハア…。まあ納得するしかないか…。それよりも…」

ギヤツギヤツ、ガサガサガサ、バサバサ、チュルルルル…

この不気味な音がする森から出なければ…。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

「つつてもなあ…。(ガサガサ)どうやって行きゃあ森から抜けれるんだろつか…(グチャ)うわ…なんか踏んだ…」

篝日掠、絶賛迷い中である。

「マジありえねえ…。帰宅部の俺にサバイバルしろってほうがおかしいだろ…。現代っ子ナメんな！」

「つうかなに？こんな森にほっぽり出されて俺になにをさせてえんだよ…。元はと言えばあいつが突然話しかけてきたからこんなことなっちまったんじゃないかねえか…。いや…そもそも学校なんてものを日本が作ったから悪いんだ…。政府がもつとしつかりしてたら…ブツブツ…」

そして絶賛混乱中でもある。

「(ガサツ)…ん？なんだ？今の音…」

ガサツ！！

〈20分後

「ハア…ハア…ハア………」

ここまでくりや大丈夫か…？

「ハツハツハツハツハ」

マジかよ…。でももう走れねえ…。

「クソツ…ここまでか…」

だったら…抗ってやるうじやねえか！

「グガアアアアアアアア！…！」

「うおおおおおおおおお！…！！…！」

ドガッ！ザクッ！

狼の爪が横腹を抉る。

「ガハア！」

ビチャ

「（クソ…ここで死んじまうのか…？）」

横腹からは血が溢れている。

正直言ってもう体が動かない…。

「グアアアアアアアア！」

狼の一撃が俺を襲う。

俺はそこで意識を失った。

「？」

「ここは…どこだ…？」

「まったく…なにしてるんですか？」

お前は…

「て…天使…！」

「はい、天使ですがなにか？」

「いや、なんでここに…!?つかここどこ!?？」

「落ち着いてください、それは今から説明します…！」

天使の言うことを簡単に説明するところだ、

天使は俺をこの世界に送ってからずっと監視していたらしい。そして狼に襲われるところを見たが能力を与えたので大丈夫だと思っただ。

しかし能力を使わず必至こいて逃げる俺を見て呆れ…。

死にそうになったところで気絶させ、能力の使い方を教えるために精神世界に表れた、と。

「こんな感じか」

「まあそんな感じですよ」

「それで？どうすりや能力使えんだ？」

「能力を使うにあたって一番大事なのは想像力イメージです。と言っても現時点で使える能力と言ったら物質変化だけなのでイメージしにくいかもしれませんが…」

「ん？確か5、6個能力もらったよな？何故使えないんだ？」

「努力の才は努力する才能があるだけですし、光適正、魔力最大は今魔法が使えないので無理。身体能力強化は常に発動状態ですし、だから狼からここまで逃げれたんですよ？まあ体力がなかったので追いつかれましたが…。天使の加護も常に発動状態です。なので必然的に使えるのは物質変化しかないのですよ」

「そういうことか…。まあわかった。イメージして頑張ってみるわ」

「はい。では精神世界から意識を引き上げます。あ、おまけで体の傷を治しておきましたので。」

「そっか、サンキュー」

「いいえ。それでは。次は殺されないように頑張ってください」

「ああ」

俺の体はどんどん粒子化していった…。

）．）．）．）．）．）．）．）．）．）

狼は完全に捕食対象を殺したと確信した…。

はずだった。

食いつこうとした瞬間、捕食対象が眩い光を放ちはじめた。

そして狼は驚き、見入ってしまった…。

死んだを思っていた捕食対象が立ち上がってこちらを見ていたことに。

そして白銀の髪をなびかせ、悠然と佇むあまりに美しい捕食対象の姿に。

）．）．）．）．）．）．）．）．）．）

俺の意識が浮上してから最初に見たものは、俺を見つめて微動だにしない狼だった。

俺は狼に手を向けイメージした。

狼の体が粒子状になって消えていく姿を。

「…すまないな」

狼は自分が死んだこともわからずに消えてしまっただろう…。

初めて動物を殺してしまった…。

溢れてくる罪悪感と共に、俺はゆっくり意識を手放した…。

意識が消える時、誰かが木の影から出てくるのが見えた。

あの人は…いつ…たい…。

2話 旅立ち…？（後書き）

いや〜作者的にはすごく頑張りましたw w

だいぶ長く書けたと思います！

次回もはりきって書きますb

3話 人(に)発見(される)(前書き)

何百話もやってる人で連続投稿する人は、もはや神の一員なのではないかと疑います。

始めて3日目でアイデアが尽きた作者です…。

3話 人(に)発見(される)

「誰!？」

「バタ…。」

「棕は突然倒れ伏した…。」

「倒れると同時に美しい銀髪が元の黒髪に戻っていく。」

「大方、血を多量に流したことで初めて能力を使い、普段使わない精神力を使ったことによる疲労であろう。」

「ガサッ」

「…小屋に運ぶか」

「…」

「すう…すう…すう…」

「現在、棕は小屋にいる。」

「この人、いやこの女性、ディオス・アーシャルに助けられた。」

「ディオスは最初、血に濡れた横腹を見て重症かと思ったが何故か塞がっていた傷口をみて軽傷と判断し、こうして寝かせている。」

「(この人は一体…)」

そう、ディオスは棕の戦いを見ていたのだ。

↳数十分前

ディオスはいつもの日課である朝の鍛練を終えて、近くの川へ水を飲みに来ていた。

「……………おおお…」

「ん？今のは…」

その時、ディオスは、なにか叫び声のような音を聞いた。

ちょうど棕が雄叫びをあげながら狼に立ち向かって行った時である。

「…行くか」

言つと同時にディオスは走り出した。

↳・↳・↳・↳・↳・↳・↳・↳・↳・↳

「なっ…！？」

ディオスのいた所からわりと近かったので、声がした所にすぐ着いた。

そこで目にしたのは…

「グアアアアアアア！」

今にも食らいつこうとしているあの神速の魔物として恐れられるウエアウルフと、横腹から血を流し、弱々しい足取りで立っている青年だった。

「クッ…！」

いつも常備している剣は鍛練が終わったので外して置いて来てしまったのだ。

素手で戦おうにも相手には鋭い爪と牙、何より凄まじい速さがある。まず武器無しで倒すことは不可能であろう。

「（それでもこちらに引き付けて彼から離すことくらいは出来る！）
」

そう考え、飛び出そうとしたとき、いきなり死にかけていた青年が目映い光を放ち始めた！

「な…なんだ！？」

ウエアウルフのほうに目を向けてみる。

ウエアウルフも驚いているのだろう、動きが止まっていた。

そしてもう一度青年の方を見て…目を奪われた。

そこには、さっきまで死にかけていたとは思えないほど威風堂々と美しい銀髪をなびかせた青年が立っていた。

そしてゆっくりとウエアウルフに手をかざし…

「…すまないな」

と青年が言うと同時に、ウェアウルフが粒子になって消えていった！

「なんだ、あれは！？」

「（あんな業、見たことない！魔力の流れがないから魔法ではないんだろうが…魔法なしであんなことが出来るのか！？）」

青年は不可思議な能力を使ってあっさりウェアウルフを倒してしまっ
た…。

その後、突然青年が倒れてしまった。

倒れると同時に美しい銀髪も、黒髪に戻っていった…。

色々な事が起こり、多少混乱していたがとりあえず青年の傷を治す
ため、青年に近付いていった…。

く…く…く…く…く…く…く…く…

「う…う…うん…」

「ここは…どこだ…？」

俺は一体…何を…。

確か狼が…。

「…！！！！狼はっ！？」

俺は飛び起きた。

どうやら俺は小屋かどこかにいるようだ…。

しかも体に付着していたはずの血が消え、一応という感じに包帯が巻いてあった。

一体誰が…。

「ああ起きたのか。安心しろ、オオカミ…とは何かわからないがウエアウルフなら君があっさり倒してしまっただよ」

そして目に入ったのは、少しボロボロだが丈夫に組まれた板張りの壁に寄りかかっている、綺麗な蒼く長い髪をした美女だった。

「…どちら様？」

「人に名前を聞く前に自分の名前を言えと習わなかったか？」

恥ずかしい…そんな常識を忘れていたなんて…。
しかもすげえ冷静に返された。

「失礼しました。俺の名前は篝日棕と言います。棕と呼んでください。それである…これは、あなたが？」

「カガリビ・リョウ？珍しい名前だな。ここら辺じゃ聞かない名だ…。私の名前はディオス・アーシャルだ。気軽にディオスと呼んでくれ。あとその包帯は私が巻いた。傷は何故か無かったが一応な」

この人…いや、ディオスさんがここまで運んで治療してくれたのか…。

「そうですね…。助けさせていただいてありがとうございます、ディオスさん」

「ああ気にしなくていい。私は倒れた君をここまで運んで包帯巻いただけだからな。別に畏まらずに普通に話してくれて構わないぞ？あとディオスと呼び捨てにしてくれ。さん付けは嫌いだな」

「おおいさぎ良い人だな。」

「いい人っぽいで。」

「わかりまし…。わかった。まあここまで運んで、治療までしてくれたことに礼を言わせてくれ」

「ああ礼は確かに受け取った」

「なんか堅い人だな…。」

「まあいいやつっぽいからどうでもいいが。」

「…んで？なんで助けてくれたんだ？」

「ん？ああそれは…。」

回想中、回想中、回想中

「…ということだ」

「ふうん」

「あとリヨウが使った業が気になってな」

「業？ああオオカ…ウエアウルフに使ったやつか？」

「そうだ。あれはなんなんだ？」

なんなんだと言われてもなあ…。

結局、夜通し説明する羽目になった…。

3話 人(に)発見(される) (後書き)

いや〜すごく長くなりそうだったんで切りましたWWW
かなり疲れましたよ、ええホントに…。

今日は友達の手助けが無かったため難産でした。

文才欲しい…。

4話 修行？（前書き）

ハア…

台風氏ね…間違えた死ね…

4話 修行？

くどうしてこうなった!？

おはよう。

昨日オオカ… ウェアウルフに襲われてフルボッコにされた掠だ。

まあフルボッコに仕返したけどね！

ごめん。嘘。あいてを粒子化しただけだから戦いにすらなってるません、はい。

昨日ディオスに説明していたらウェアウルフを殺したことに對し、また罪悪感が出てきたけどディオスがフォローしてくれてなんとか持ち直した。

ホント、ディオスには感謝しきれないよ…。

そうそう。

なんか昨日話してるとき（ちなみに異世界から来たことはまだ話してない。こんな突拍子もない話は信じないだろうしな）に今までにあんな戦い？をしたことないと言ったらたいそうびっくりされて…

「そうか…。よし！私が鍛えてやろう！」

とかなんとか…。

どうしてこうなった…。

なので今、ディオスを待っている最中なのだ。

そして今から、早速修行に取り掛かるらしい。

朝早くに叩き起こされたし…。

昨日の夜遅くまで能力について教えていたので正直、今すぐにも寝たいんだけど、せっかくの好意を無下にするわけにもいかないし…。

ハア…先が思いやられる…。

まっ…せっかくだし、頑張って強くなりますか！（努力の才発動）

）．）．）．）．）．）．）．）．）．）

さて…。

今日からリヨウを鍛えることになったディオスだ。

あの話が終わったらリヨウがどこかへ行ってしまう気がしてな…ん？何故私はこんなことを思ってるんだ？

ああそうか…人が恋しくなっただんな…。

まあなぜ恋しくなっただかはいずれ昔話も交えて話すと…。

「よし、そろそろ始めるか」

そういつて準備を終えた私はリヨウの所を目指した。

「……」

おせえ……。

どこの世界でも女は準備に時間がかかんのか？

まったく……。魔法とか魔物とか色々ありえんものがあるんだから、他の部分も違うのかなとか思ってみただけど案外違いが少ない……と来たみたいだな。

「待たせたか？」

「ああ」

「……そこは嘘でも待つてないと言っべきだろ。まったく……女心というものを理解していないな」

「うん。俺もディオスが持つてるものがもつとまともだったら言ってたかもね。でもね、君の持つてるおかしいもの！ムチだもの！」

え？なんなの？調教されるの？

俺の歪んだ心を矯正しよう？いや歪んでるかどうか知らんけど。

「いや、調教なんてしないからな？私の武器だからな？」

何故わかったし。

「るせえ！」

ダメにも程がある。

試しに剣術の型をやらせてみたが…。

「よし、その動きで素振り百回だ」

「重っ！？無理無理！」

とまあ…アレだ。筋肉がない。

というわけで。

「筋肉をつけることから始めようか」

「そっからかよ！？」

まだまだ道のりは長そうだ…。

4話 修行？（後書き）

いや〜三日坊主とかシャレにならるので投稿しましたwww

頭から絞り出したので多少おかしいところがあるかも知れませんが、もしあったらズバズバ指摘してください。

5話 修行中（前書き）

いつの間にかPVが2600アクセス超え、ユーチューブが6000人近くになってました…。

こんな駄文でも読んでくれる人はいるんですね…（-_-;）

作者はびっくりしつつ感激しております。

講読してくださってる方、一回だけ読んだ方もありがとうございます。

5話 修行中

「筋トレ!？」

おはよう、修行を始めて数ヶ月経った掠だ。

え?時の流れが早すぎる?

仕方ないだろ?それともなんだ?

男が汗水流しながらひたすら筋トレしてるところを描写しろと?

そんなの、作者が嫌がって書かんわ!…なにを言ってるんだろ、俺。

まあいいや。

とりあえず今、もはや日課となった筋トレ(ディオスは修行ってる)と体力をつける為のランニングをしている。

修行を始めた時は春のような陽気な暖かさだったから筋トレもランニングも楽だった…が、数ヶ月経ち陽気な暖かさが地獄の熱気になつてから状況は一変した…。

なんで異世界なのにこういうところは元の世界と同じなんだよ…。

あ、そういや異世界から来たことをディオスに話したぜ。

この数ヶ月、リヨウはずっと筋トレ？とランニング？とリヨウの世
界言づらしい。

とりあえず、筋肉と体力を付ける修行をしてきた。

筋肉、体力を付けるのに才能などは関係ないからな…。

ずっとやらせてきたがあいつは一回たりともサボらずに黙々と筋肉
と体力を付け続けた。

なので大分遅い体つきになっている…と思う。

まともに見たことはないから知らないけど。

大分基礎である身体が出来上がったから最近では剣術と拳闘術の修
行も始めた。

あいつ…武術の才能があつたのだろうな。

教えたことを直ぐ様自分の物にしていつてる。

教えているこつちとしては楽しいからいいけどな。

「お〜い！」

む、呼ばれたな。

「どっした？」

「いや、今日なにするのかなあ、と」

ふむ…見たところ筋トレとランニングは終えたらしいな。

「それじゃ、今日から剣術、拳闘術重視の修行に入ろうか」

「え！？んじゃ筋トレとランニングはしなくても…！」

「いやしろよ？」

筋トレとランニングが終わるかもという希望に目が物凄く輝いたが、私が発した言葉によって捨てられた子犬のような目に変わった…正直言ってかわいい。

「だが修行はいつもの4分の1でいい。それで剣術と拳闘術の修行時間を増やす」

「マジか！？やったー！」

こいつは世間で言う『美形』に当てはまるだろう。

中性的な顔立ちにちょっとボサツとしている髪形。

そんなやつがあんなにキラキラした目を見ると…たぶん大概の女が落ちるだろうな。

なんというか、母性本能がくすぐられて。

私は外見より中身を見て相手を決めるからな…。

まあこいつ、この数ヶ月一緒にいて思ったが、然り気無い気配りと

か出来るし、空気読めるし、優しいし、一緒にいて面白いし…って
なにを考えているんだ私は。

これでは私がリヨウに惚れているみたいではないか／＼

「…どうしたんだ？顔赤いけど」

「！？／＼／」

気付いたらリヨウの顔が目の前にあった。

ちよつどそんなことを考えていたから、どんどん顔が赤くなるのが
わかる。

落ち着け、私。

「…ふう。なんでもないさ。さあ修行を始めよう」

「？ああ張り切って行きますか！」

なんとか誤魔化せたようだ。

よし！気を引き締めて修行に取りかかろう！

5話 修行中（後書き）

ういゝ出来たゝ

四時限目での投稿です。

はっきり言って学校をナメていると思われる作者です。

番外 登場人物紹介（前書き）

昨日は更新出来なくてすみません。

ネタが無くなったんです、はい。

次の展開が一ミリも頭に浮かんできません。

つうわけでもう少し考えさせていただきます。

ぶっちゃけこれも話数稼ぎです。

もう少し…もう少し俺に考える時間をくれ！（涙）

番外 登場人物紹介

く2人だけ!?

主人公：篝日棕（かがりびりょう）

年齢16歳、身長175センチ、体重56キロ、容姿は中性的な顔立ちにわりと長めに伸ばした所々跳ねているボサツとした黒髪。能力使用時は白銀の髪になる。たぶんイケメンの部類。性格はわりとおちゃらけているが、空気が読めるので、大事なところでは真面目になる。あと基本、誰にでも優しい。頭は良い。運動神経もいい。わりと高物件。

説明：天使（見た目完全に幼女）に元々いた世界で会い、いろいろあったのち幼女（以下天使の事は幼女と呼称）のぶっ倒れてた所にあった黒い穴に（友達のせいで）落ちてなんか意味わからん空間へ。そこで幼女から色々突拍子もない話を聞いてごちゃごちゃあったのち能力を貰って異世界へGO。そうして森に落とされ、さ迷い、狼（こつちの世界ではウェアウルフ）に襲われ、フルボッコにされ、フルボッコに仕返し、ぶっ倒れ、そこでディオスに拾われた。それからディオスの世話になりっぱ。

現在、ディオスの元で修行中。

能力：努力の才

説明：最初貰ったのはこれだけだった。能力の詳細は本編中の天使の本を参照。

能力：光適正、魔力最大、身体能力強化、物質変化、天使の加護

説明：これらは全て天使からのサービスで貰った能力。

詳細は本編中の天使の本を参照。

ウェアウルフから逃げる際に、身体能力強化のおかげで大分逃げる
ことができた。身体能力強化のおかげで武術の達人並みの身体能力
を發揮できるはずだが、如何せん主人公は武術を習ってなかったの
で逃げることにしか使用しなかった。宝の持ち腐れ。

ディオス・アーシャル（ ）

年齢19歳、身長168センチ、体重：は言わないほうが良いだろ
う。主に作者の命的に考えて。容姿は長い蒼髪に整った顔立ち、凛
とした佇まいで凄く大人っぽい。間違いなく美人の部類に入る。性
格は大人しく、冷静。誰にでも分け隔てなく接する。基本優しい。
困っている人を見たら放っておけない。後、何気に武術ができる。
やれば出来るの体現者。完璧美人。

説明：棕がこの世界で初めて会った人。ぶっ倒れた棕を助けてくれ
た人でもある。色々あって棕に武術を教えることになった。現在、
棕の師匠的立場の人。棕にとって超恩人。

能力：特に無し。

説明：強いて言えば色々な武術ができる。

番外 登場人物紹介（後書き）

うし、時間稼ぎが完成した…。

6話 昔話（前書き）

2日間更新出来なくてすいません。

一昨日は単にネタが浮かばなかったから書けなかったんですけど昨日は…。

思い出したくありません。

強いて言うなら人生で一番最悪の誕生日でした。

一時ストレスで精神の状態がヤバかったけど、お袋と弟の尽力でなんとか持ち直しました。

この駄文を楽しみにしてくれている人がいるかはわかりませんが、ご迷惑をおかけしました。

ちなみにPVが4500アクセス、ユニークが9000人を超えていたのでテンションがかなり上がりました。

これも皆様のおかげです。ありがとうございます。

6話 昔話

「張り切り過ぎた!？」

やあ。

だいぶ前に異世界に吹っ飛ばされた掠だよ。

この世界に来てすぐにウエアウルフに襲われ、戦い方なんて知らない俺はフルボッコにされ、ぶっ倒れた俺を助けてくれたディオスのもとで、生き残るために数ヶ月間、修行を積んでいただけだ。

うん、まあみごとに張り切りすぎて倒れたね。

俺が張り切ったっていうよりディオスのテンションが異様で、朝の筋トレ&ランニングが終わった瞬間に三時間ぶっ通しで剣術を教わり(休ませてと言ったけど聞こえてなかった。というより聞こえなかった)昼食休憩的なのを30分ほど挟み、今度は拳闘術を五時間ぶっ通しでやらされて「お前は反射神経(要はフットワーク)が足りない!と、いうわけで今からナイフをお前に向かって投げ続けるから避けるよ!」とかなんとか言っただけ回され、いくらランニングで体力が付いたと言っても限界が来たらしく、捻挫打撲裂傷酸欠筋肉痛腹へりetcのおかげで倒れました。

うん、おかしいところがあるよね。

なんで…なんで…!

なんでディオスは倒れないんだよ！

あいつ何！？なんでコツチがハアハア息切れしながら動いてんのにハッハッハア！とか笑いながら迫ってくるの！？下手なホラー映画より怖かったんですけど！

ナイフ投げながら追ってきたときなんて、もはや幸福に満ちた顔してたけど！？

辟易するわ…いやマジで…。

まあそのせいで精神的にも若干ダメージを受けて倒れたわけなんだけれども…。

さすがにぶっ倒れたときは意識を取り戻し、自分のやっていたことを反省し、謝りつつ、今現在看病してくれている。

ありがたいけどさ。

なんか絶賛落ち込み中なんだよね。

しかも落ち込み様が半端ない。

なんかあいつの周りに青い縦線が見える。

効果音にすると「ずん」という擬音が似合う。

やれやれ…。

慰めてやるか。

く・く・く・く・く・く・く・く・く・く

……ディオスだ。

今日の修行で張り切りすぎて、気がついたらリヨウが倒れていた。

感情のコントロールが出来ないとは……。

私もまだまだ未熟だな……。

リヨウに怒られる覚悟で謝ったら笑って許してくれたが……。

どうせならキツイ一言でもかけてくれたら気が楽になったのに……。

今、私は端っここで座って反省中だ……。

「ディオス」

リヨウが話しかけてきた。

「……なんだ？」

「そう気負うなよ。俺だって張り切り過ぎちゃう時あるしさ。怪我だって大したことなかったし。なんか嬉しいことでもあったからテンション……気分が高揚しちゃったんじゃないのか？」

うっ……こういうときだけ鋭い……。

「ハア……。確かにそうかもしれないな。……ちょっと昔話に付き合っ

れられて誰も見てくれなくなつて捨てられてしまつのではないかと…。そこで彼女は唯一の自慢である運動神経で武術を鍛えようと思ひました。それと同時に勉強もしました。どちらも必死に努力しました。周りの人は、いきなり二女が狂つたように武術と勉強を始めたので何事かと騒然としました。そして15になつたとき彼女の両親が彼女に話があるから、と自室に呼びました。しかし彼女は部屋に行きませんでした。彼女は恐れられたのです。両親にいらぬと言われるのを。そして彼女は家を飛び出し、宛もなくさ迷いました。ある日、森に迷い込んだとき彼女は小屋を見つけました。そして彼女はそこに住始めました…」

「……………」

ディオスにはこんな過去が…。

俺を信用してこの話をしてくれただな…。

よし俺の過去も話そう…。

6話 昔話（後書き）

ふひいゝ疲れた

次回、主人公の過去が明らかになります。

7話 棕の過去（前書き）

そのまんまのサブタイで久しぶりの投稿でございます。

久しぶり！作者のこと覚えてるかな！覚えてないよね！

ハア…orz

自分で言ってる悲しくなった…。

未だに俺の友人である神夜クン（ユーザーネーム）からしか感想をもらってない…。

感想とか！アドバイスとか！批判…はオブラートに包んでもらえると嬉しいけど！

書いてください！絶賛お待ちしておりますよ、はい！
たぶん書いてくれたら嬉しさのあまり発狂します！

それではどうぞ！

楽しんでもらえたら幸いです！

7話 棕の過去

「信用!？」

「……………」

「……………」

「やっほー!ディオスのビックリな昔話を聞いたかった棕だよ!

…ダメだ、キャラに合わねえ…。

うん、まあ文字どおりディオスのビックリな過去を聞いたわけだけ
ど…。

重いね!空気が!重力の力を垣間見たヨ!

だからキャラに合わねえつつってんだろ!俺!

しかしまあどうしたもんかねえ…。

ディオスが生い立ちを話してくれたんだから俺も昔話しようかなあ
と思っただけいんだけど。

俺、この空気の中で語り始める勇気なんて持ってないんですけど!?

ああ…前の世界でいた友人達と朗らかに笑いあっていたあの頃が懐
かしい…(現実逃避)

ディオスだ。

さっきまで私の過去を話していたんだが…。

話し終わったら双方が黙ってしまったから、なんとも言えない空気になっていた…。

そうしたらリヨウが自分も過去を話すと言った。

確かに、リヨウのことは異世界から来たことくらいしか聞いてない…。

ん？どうして異世界から来たことを信じたか？

それは、あいつが嘘をつくような奴じゃないと信じているからさ。

とにかく、リヨウの過去の話は今まで聞いたことがなかったし、話すような素振りも見せてなかったのでビックリして聞き返してしまっただ。

「…いいのか？」

「いいのかって…俺を信用して話してくれたのに俺だけ話さないなんておかしいじゃん。まあ今まで話さなかったことがおかしいんだが…」

「そうゆうことじゃない。今まで話さなかったのは、何か話したくないことがあるのではないかと思っていたんだ。そうでなければ、信用してもらえてないのかと…」

そう、私はこの二つのどちらかの理由で話さないものだと思っ
た。

だから無理に聞き出そうとは…」「はあ…」

「む。何故ため息を吐くんだ」

「お前、そんな心配してたのか？今まで話さなかったのは、単に機
会がなかったただけだ。それに、信用してなかったらとっとと出てい
ってるぞ」

まったくこいつは…

「ふふっ、意趣返しのつもりか？」

「ふん、どうだろうな？ただ…信用してるのは本当だぜ？」

…嬉しいことを言ってくれるじゃないか。

））））））））））））））））

何となく空気もいつもみたいになってきたな。

「さて…どこから話そうか」

うーん、まああの事件からくらいでいいかな。

「俺さ、12歳のころまでは普通に、自分で言うのもなんだが幸せ
に暮らしてたんだよ。不器用だけど優しい親父、いつも笑顔でいる

お袋、いつも俺にまとわりついてくる歳の離れた幼い妹。別に裕福なわけじゃなかったがそんな家族に囲まれて暮らしているのがとても、幸せだった。だけど……」

俺は言い淀んでしまつう。

あのことを、思いだすから。

「……………」

ディオスは何も言わず、黙って聞いていてくれる。

ディオスには本当に感謝しきれないな。

「…俺が、13歳になる前にある悲劇が起こつた」

そう、文字どおり、悲劇が。

「家族が…強盗に襲われた」

「ッ!?!」

ディオスが息を飲むのがわかる。

「運悪く…な。その日は親父は仕事が休みで、お袋は仕事をしてないし、妹はまだ三歳になつたばかりだったからいつもお袋が面倒を見ていた…。そんな日に限ってみんな家にいたんだよ。しかし俺はその日、友達のところ遊びに行つてたんだ…。だから…帰つたときには……」

「もういいっ！もう…それ以上はっ…」

「…ありがとう。でも、続けさせてくれ。聞いて欲しいんだ」

「…」

ディオスは…優しいな…。

「それで…帰ったときには…全て終わっていた。そう、全てな。本当に一瞬だったよ…幸福な時が消えたのは。俺は…その日から家族を失った。今までであった幸せを失った。希望を、夢を失った。そして…自分を失った」

「そ…んな…」

「気負うなよディオス。俺が話したくて話してんだ」

「でも…私は…リヨウの辛い過去を…」

「掘り起こしちゃまったってか？それこそ、お前の責任じゃねえ。とにかくまだ続きがあるんだ。聞いてくれ」

「…ああ」

「それからな…。俺は何事にも無関心になって、何をするにも無気力になっちゃったんだ。言われたことしか出来ないような人形みたいになっちゃった。当然、学校にも行かなくなった。学校…のことは前、話したよな？それで、俺の友達やら親戚はなんとか俺を立ち直らせようと頑張ってくれた…。だけどいつまで経っても立ち直る気配のない俺から、次第にみんな離れていった…。だけど…1人だけ、諦めずに、俺が立ち直ると信じて介抱してくれた奴がいたんだ。

そいつは俺の昔からの親友…というか幼馴染みだった。そいつのお陰でようやく立ち直ったんだ。それからは普通に学校に通い、過ごしてきた。…これでお仕舞いだ」

「……………」

あららあゝまた空気が重くなっちまったな…。

「あ…そついやこの世界に突き落としてくれたのもそいつだぜ」

「…リヨウは（ボソッ）」

「ん？」

「リヨウは…強いな」

ん？俺が強い？

「そりゃねえべ。俺は…助けてもらったただけだしな。ディオスのが強いだろ」

「（クスッ）…そうか」

「ああ！」

なんかディオスも元気になったっぽいな。

「つか親友には今でも感謝してんだよ」

「まあ自分を助けてくれたんだしな…」

「そうじゃねえって。確かに救ってくれたのにはめっちゃ感謝してるけど…俺が今感謝してんのは、この世界に突き落としてくれたことだよ」

「？なんでだ？」

だつて…

「ディオスに…出会えたじゃないか」

「……（ボツ）／／／な…ななななっ…！／／／／／」

「ん？嬉しかったのか？（ニヤニヤ）」

「おっ…お前と言う奴は…ッ／／／」

「…あの…その剣はどっから出したの？」

「…成敗ッ！」

「ちょ…まて！それは洒落になら…」

ギヤアアアアア…

じつって時は過ぎてる…

7話 棕の過去（後書き）

なんか最後の無理矢理感が半端ないです。

ご意見要望ご感想、お待ちしてます。

8話 終わりと始まり（前書き）

ちよつと時間すつ飛ばします。

タイトルから推測してください！

それではどうぞ！

8話 終わりと始まり

く…え!?

サブタイのサブタイ的なものが凄く適当な気g……………失礼、戯れ言だ。

そしてこんにちは。

毎度お馴染み三河y…………ゴホンツ、掠だ。

ああさっきのも戯れ言だ。気にするな。

…なんかふざけてるって？

失礼な！正常だ！（どこが？

誰だ！今どこが？とか言った奴は！

泣かずぞ！

…すまない、取り乱したな。

まあ何故こんなにもふざけているのかというところ…。

うん、特に意味ないヨ

としか言えん。

または…

理由はない！強いて言うならば作者のテンシヨ（ピーー

…なんか雑音入れられた気がする。

まあ俺のおふざけや作（ピーーのテンションがどうとかは置いておこう。

あの『超ビツクリ！？衝撃の黒歴史暴 露 大 会 』から数カ月経った。

…ええい！俺のおふざけがどうとかは置いておけと言っただろう！

ゴホンッ！

俺が異世界こっちに来てから早くも1年近く経った。

色々なことがあったな…。

突然、この世界に飛ばされ、天使…と、というか幼女に会い、落ちたところは木と本しかなく、適当に歩いてたらウエアウルフに襲われ、ボコボコにされ、ボコボコにしかえし、ぶっ倒れ、ディオスに出会った。

そして修行をつけてもらっていたんだが、それも3日前に終わった。

ディオスに教えてもらっていた剣術と拳闘術は粗方習得したし最後のほうはディオスに常勝だったからな。

筋トレとランニングをサボらずやり続けたので、筋力と体力が凄くついた。

あの、全世界の帰宅部の身体を体現したような体型だった細い身体が、凄く引き絞られ、自分でも驚くような細マッチョが完成した。

まあ努力の才のお陰だな。

あれがなかったら絶対途中で投げ出してたなあ、うん。

だってさ、まあ最初の頃は筋力も体力も無いわけじゃん？

つまりは凄いキツイわけだよ、筋トレとランニングが。

その後、ディオスの悪意1000%のスパルタ修行が待ってんだぜ？

普通なら絶対投げ出すね。

ああそついや魔法も多少教えてもらったぜ！

つってもディオスも魔法使いじゃないから、魔力運用の仕方と初級魔法をいくつか教えてもらった。

これも頑張って習得したぜ！

マジで努力の才をもらって良かったと感謝感激雨あられだったよ。

するとどっからかあのバカ幼女の「ふっ」と誇ったような鼻息聞こえ、無い胸を張っている姿が浮かんだような気がしたので、完全に脳が認識しきる前に脳内から消去した。

うん俺は間違ってない。

閑話休題

そして今日、いよいよ旅立つ。

この3日間、何してたんだって？

そりゃあお前、ナニに決まっ t (r y

嘘だ。

色々と、旅立ちの為の準備をしていた。

俺は今、なんかディオスがどっから取り出してきた、白地の右肩の辺りから斜めに何やら文字が書かれているTシャツみたいなやつに黒いロングコートを羽織り、黒いジーパンみたいなのを履いている。意外とジーパンみたいなのやつはピッチリしておらず、若干ダボっていた。ジーパンっつーよりカーゴパンツみたいな感じだな。

なんでも知り合いからもらったもので使わないらしいから俺にくれるという。

それから食料や地図の用意、行くべき町の名前やらこの世界の一般常識的なのを叩き込まれた。

どうせならこんな詰め込みじゃなく、前から教えてもらいたかった。

前に一度、教えてもらおうとしたら「修行だ、修行！」とまったく相手にされなかった。

ああ文字は天使の加護のお陰で読み書きバツチりだ。

何気に便利だな少女の加護…あ、間違えた。天使の加護。

そんなこんなで慌ただしく準備をしつつ、3日間を過ごした。

そして今日、なんか師匠として渡したいものがあるらしい。

なんか取ってきてくるとか言って倉庫のそこに行つたままなかなか帰ってこない。

実は小屋の後ろに倉庫があったことはだいぶ後に知った。

あることは知ってたけど如何せん入らせてもらえなかった。

なんでも見られたくないものも色々と入っているらしい。

まあ嫌がることを無理にはしないから、結局最後まで倉庫の中を見ることはなかった。

一体何が入っていたんだろう…。

そーいやあいつ、3日前から元気がない。

うん。

俺が修行終わった瞬間に「ヒヤッハアアアア！」と叫んだのが気に障ったのだろうか。

それか俺が突然旅立ち宣言したから色々用意するのがめんどくさかったのだろうか。

たぶん後者だな。

この3日間で大いぶむちゃさせちゃったし。

もっと前から言うべきだったな…失敗した。

今までのお礼に渡そうと思っていたもののほかに何かあげたほうがいいだろうか…。

）．）．）．）．）．）．）．）．）．）．）

ハア…ディオスだ。

リヨウが突然旅立つと言ってから3日経った。

そして今日いよいよ出発する。

正直もっと長く居てくれるものだと思っていた。

リヨウ曰く、世界を見て回りたいらしい。

好奇心に満ち溢れている目をしていた。

たぶん本当に楽しみなのだろう。

だからその時、私も戸惑ったが了承した。

しかし時間が経つにつれ、後悔の念が増えていった。

もっと一緒にいて欲しいと思った。

何故あそこで止めなかったと自分を責めた。

それと同時に自己嫌悪した。

まったく、私は小さい女だ…と。

リョウの自由だというのに。

リョウの意志が一番だろうに。

そう思ってみてもやはり後悔は消えない。

笑顔で送り出してやりたいと思っても笑顔になることが出来ない。

どうしてこんな気持ちになるのかは、自分で理解している。

リョウのことが、好きなのだ。

師匠としてでなく、友人としてでなく、異性として。

それに気付いたのはいつだったかリョウが修行で倒れてしまった日だ。

その日から少し前から、私はモヤモヤした感情を持っていた。

リヨウの真剣に修行をしている横顔を見ると胸がどきどきする。顔が熱くなる。

これがなんなのかわからず、ずっとモヤモヤしていた。

病気なのではないかとも思った。

しかしある言葉が浮かんできて、そんな考えなど吹き飛んだ。

『好き』

モヤモヤが一瞬にして消えた。

そうか、私はリヨウのことが好きだったのか！

清々しい気分になった。

初めて異性を好きになった。

友人や親に対する好きという感情なら知っていた。

しかし異性に対して好きだと思ったことはなかった。

そうか、これが女としての悦びなのかと思った。

その感情が何故か嬉しかった。

そしてそれがわかった次の日、リヨウの顔を見たら俄然やる気が出

て、いつもより気合いの入った修行をした。

その結果リヨウ倒れてしまった。

私は自分を嫌悪した。

好きな人に無茶をさせてしまった、と。

こんなつもりじゃなかったのに、と…。

しかしリヨウは笑って許してくれた。

優しいやつだ、と再認識した。

それから幾ばくかの時が経った。

もう私ではリヨウに勝てなくなった。

これでも武術に自信はあったんだが…。

まあそんなことはどうでもいい。

今の力量ならリヨウは1人でも、稼いで生きて行けるだろう。

なので私から修行が終わった祝いとお別れの意味でプレゼントをする。

ずっと放置していたので倉庫のどこにあるか、見当がつかなかったが、見つかった。

ああ、ちなみに私はまだリヨウに告白するつもりはない。

再び（・・・）出会えたときに言うつもりだ。

っと、だいぶ待たせてしまったな、早く行こう。

）：）：）：）：）：）：）：）：）：）

お、ディオスが来たな…。

俺は思考を中断して、ディオスが来たほうへ向き直る。

「待たせたか？」

「ああ」

なんか前もこのやり取りをした気がする。

「（くすっ）そこは嘘でも待ってないと言つところだろ。って前もこのやり取りをした記憶が…」

「ハハハ、俺もそう思ってた」

「ふふっ、そうか」

それより…。

俺は気になるものを見つけた。

ディオスが右手に持っている、布にくるまれた棒状の何か。

「ん？…ああこれか？」

ディオスが俺の視線に気付いて聞いてくる。

「ああ。なんだそれ？」

たぶんアレだな。

「これは最後にお前に渡したい物だ」

やっぱりな。

「それをずっと探してたのか？」

「ああ。受け取ってくれ」

ディオスから手渡される。

意外と重いな…。

「開けてみていいか？」

「いいぞ」

包みを取ってみる。

「！…これは」

「ああ、それが最後に渡したい物だ」

布を取ると、そこにあつたのは紅い鞘に黒い鎖が巻き付いた、一本の刀だった。

鎖が鐔のところに巻き付いていて、抜刀できそうにない。

「お前なら抜けるだろうと思ってそれを持ってきた」

「…認められたものにはか抜けないとか、そんな感じ？」

「そうだぞ。よくわかったな」

ディオスが少し目を見開いて驚いている。

「うん…まあ聞きたいことが色々あるけどとりあえず抜いてみようと思う」

「頑張ってくれ。私には抜けなかったからな」

そんな期待に満ちた目をしないでええええ！

これで抜けなかったら超恥ずかしいじゃん！

まあ物は試しだ。

「せえゝのっ！」

ガシヤッ！

「……………」

「……………」

その光景に掠とディオスも釘付けになっている。

そしてゆっくりと紅い鞘から刀が抜ける。

出てきた刀身は朱かった。

それは、血のような禍々しい紅あかではなく、綺麗な輝きを放つ朱あかであった。

とても掠の銀髪と似合う朱だった。

刀身が抜けきると同時に銀髪が黒髪に戻り、荒々しい風も治まってい

く。

2人とも啞然としていたが、再起動する。

「抜けたな……」

「ああ、抜けた……」

「しかし綺麗だなこの刀。ディオス、ありがとう」

「あ、ああ……」

ディオスはまだ立ち直ってないようだ。

「んじゃ！こいつをディオスだと思って、旅に出発しますか！」

「なっ！／＼／＼なにを言ってるんだお前は！／＼／」

お、直ったか。っと納刀しとかないと。

納刀すると、右腕に巻き付いていた鎖が、また刀に巻き付いていった。

「あ、そうだ！コレ」

そう言っ取り出したのは、銀の十字架がついたネックレスだった。

「これは？」

「今までのお礼にな！もうちょい良いもんにしたかったけど、それくらいしかなくてな」

「そうか…ありがとう。大事にする」

胸元でネックレスを抱き締めて微笑みながらお礼を言ってくれる。

「なんか照れるけどよろこんでもらえてなによりだ！…それじゃ、行ってくる」

するとディオスは微笑を浮かべ

「ああ、またな（・・・）」

と言ってきた。

俺もこう言い返す。

「おう！またな（・・・）！」

振り返り、ディオスの視線を背に受けて、俺は歩きだした。

こうして俺は、まだ見ぬ世界へ一步を踏み出した。

これから、どんな町でどんな人に出会うのだろうか…。

先はまだ長い……………。

8話 終わりと始まり（後書き）

ふひいゝ今までで最長です！

ああ…親指が痛い…。

なんかこれも後半無理矢理な感じになった気がします。

ほんとは8時くらいに投稿するつもりだったけど、俺の親指が止まらなかつた…。

なんか今日はポンポンアイデアが出てきました。

ご意見要望ご感想のほど、よろしくお願いいたします。

9話 旅(前書き)

あゝあゝ！！！！！！！！！！

書いてたのが消えたorz

やる気が失せた…。

まあ書くけどね！

ハア…三時間くらいの努力が一瞬で消えた…。

9 話 旅

「能力の作用!？」

俺はディオスと別れを告げた後、しばらく鬱蒼とした森を歩き、道に出た。

「何気に初めて道に出たな…」

ディオスに拾われてから、修行、狩り、水汲みのどれかでしか小屋から出なかった。

修行は小屋の真ん前でしてたし、狩りや水汲みは森の奥のほうにしか行かなかった。

だから道に出るまでに何度か迷いかけたけど、まあなんとかあったから良しとしよう。

行くべき所への道順はディオスに教えてもらったし、地図だってあるから大丈夫だろ。

そう思い、俺は目的地へ向かって歩きだした。

道なりにずっと歩いていけばつくっばいので途中で迷うことはないだろう。

目的地? ああ言ってなかったか?

ここから一番近い（それでもかなり遠いが）街、ウィンタルというところが最初の目的地だ。

俺は歩きながら若干、まだ見ぬ目的地へ思いを馳せつつ、自身の持つ、ディオスより譲り受けた刀について考察する。

朱く輝く刀身もさることながら一番気になるのは鞘と鍔の部分に巻き付いている鎖の存在だ。

この鎖は何故腕に巻き付いたのだろうか？

使用者を離さない…いや、使用者が離せない（……）ようにする必要があるのでろうか。何故かは知らんが。

閑話休題

俺が刀を抜こうとしたとき、俺は無意識に魔力を放出したのだと思う。

俺の魔力が流れるのを感知したからな。

そして放出すると同時に鎖が魔力を吸っているのもわかった。

吸われると同時に俺の髪は銀髪に変わった…のだと思う。

ああ俺が能力を使用すると銀髪に変わるのはだいぶ前にディオスから聞いた。

たぶん能力を使用することによる副作用だと思われる。

ここである簡単な仮説が生まれる。

俺は複数ある能力のなかで魔法に関係のある《光適性》と《魔力最大》という能力を持っている。

今回の場合、光適性は明らかに関係ないので置いておく。

つまりは魔力最大が大幅に関係してくるわけだ。

たぶん順番的にはこうなるだろう。

無意識に魔力を放出する。それにより鎖に刻まれた何らかの術式が起動。魔力供給をしているもの、つまりは刀の使用者の腕に巻き付く。起動するために使用した魔力を回復するために魔力最大が発動。魔力供給を開始すると同時に魔力を回復しはじめる。そして鎖が使用者に巻き付き終わると、魔力供給をする必要がなくなるので、魔力は減らない。すると魔力を最大まで回復し終わった能力は発動を停止。銀髪も黒髪に戻る、と。

結局のところ、鎖になんの意味があるのかは全然わからん。

第一、魔力供給するだけで鎖の封印式のようなものが起動するのならディオスだって抜けるはずだ。

間違いなく別の術式が刻まれているだろう。

生憎、専門家じゃないからわからんが。

さらに言えば、納刀したとき、鎖は元に戻ったのだが、魔力を使わなかった…。

たぶん予め再度封印？できるよう、魔力を貯蓄しておく術式があったのだろう。

まあ全部憶測なんだけどねっ！

大体、専門家でもない俺にこの謎を解けと言うほうがおかしい！（誰も解けなんて言っていない）

誰だ！俺の今までの考察の意味を全否定したやつは！

…はあ、萎える。

）．．．）．．．）．．．）．．．）．．．）．．．）

こんな慣れないことを考えて歩いていたら随分と時間が経ったらしい。

空が夕焼けに染まりはじめている。

「今日はここいらで野営すっかなあ…」

そう考え、野営する場所を探す。

「この道で寝るのはありえんな。でこぼこすぎだし」

そこでここまで道なりに歩いてきて、一度も途切れることのなかった道の左右にある木々の中へ足を踏み入れる。

「おお！いいかんじの場所はつけ〜ん」

少し入ったところに半径5メートル程度の開けた場所を見つけた。

俺はすぐに野営の準備に取りかかる。

そこら辺に落ちている木の枝を集め、何本か纏めて置き、その回りに石を置いて初級魔法で火を点ける。

そつだ、この世界の魔法体系を復習しようか。

まず魔法には火、水、土、風の四系統を基礎として、回復魔法、移動魔法、空間魔法など、その種類は多岐にわたる。

水からの派生で氷を作ったり、火+土という他の系統と交ぜることでマグマを作り出すこともできる。

回復魔法は言わずもがな。

移動魔法は予め移動したい場所にポイントをうって置かないといけない。近くを移動したいのなら風の派生の高速移動、遠くへ行きたいのなら移動魔法を使う。

空間魔法は実は一番使い勝手が悪い。

相手を別の空間に〜なんてこと出来ない。

第一に発動までに時間がかかるし、作れるとしても精々赤ちゃん程度の大きさしか作れない。

この空間魔法は主に空間の拡張に使う。

小さい袋の中を拡張し、ものがたくさん入るようにしたり、小さい部屋を拡張したりするのに使う。

あとは存在しない古代魔法、《創造》、《光》、《闇》、最大の禁忌魔法《蘇生》などがある。

古代魔法は失われた技術：属性は読んで字の通りなので効果はわかるだろう。

禁忌魔法は使ったら、使用者に代償を払わせる魔法だ。

《蘇生》はある意味誰もが求める技術かもしれないが、実は本当に生き返るわけではない。

蘇生とは名ばかりで実際は死体を操り人形にする魔法だ。

降霊はするが、しゃべることも動くことも出来ず、使用者の意のままに操られる。

しかしこの魔法にはリスクがある。使った分だけ毎回代償を払うのだ。代償は発動と同時に強制的に奪い取られる。

例えば寿命。これだったらまだいいが、もし代償が腕だったとしよう。すると発動と同時に代償を取られるので使用者はいきなり腕が無くなり激痛でまともに死者を操ることも出来なくなるだろう。

だから禁忌魔法なのだ。

他にも固有の属性を持つものがあるが上げれば切りがないので割愛する。

「ってこんなもんだったかな」

意外と覚えていたことにビックリ。

「焚き火もいいかんじになって来たし、飯作るか」

俺はもってきた食材とコンパクトな調理器具を取り出して料理を開始した。

〽20分後

飯を食い終わり、もって来た毛布にくるまって、寝た。

え？展開が早い？

そんな日もあるさ。

〽・・・〽・・・〽・・・〽・・・〽・・・〽・・・〽・・・

翌朝、早めに起きた俺は、朝食（持ってきたパンみたいなやつ）を食いつつ、持ち物などを整理して早々に出発した。

「夜中に魔物にでも襲撃されるかと思ってたけど、案外そんなことなかったな」

そんなことをぼやきつつ、歩みを進める俺。

既に歩き初めてから二時間が経過している。

ここら辺は平和なのかも…と考えつつ歩いていると、ふと道の両端の木々が途切れた。

そしてそこに広がっていたのは…

「うわぁ…」

背丈の低い草花が柔らかかそうに揺れている広い草原だった。

そしてその向こうに…

「あれが…」

今回の旅の第一目標であった回りを立派な城壁で囲まれたウィントルの街があった…。

9話 旅（後書き）

ういゝ完成したゝ

一回消えてテンションだだ下がりだったけどなんとか書き上げた。

ご意見要望ご感想、お待ちしております。

10話 ウィンタルの街（前書き）

またもやそのまんまのタイトルですww

ああ…話の展開をどうすればいいか…わからない…。

渡りガラス様、アンケートに答えていただき、ありがとうございます！

もうお礼は言ったのですが、この場を借りてもう一度言わせてもらいました。

今だ1人しかアンケートに答えてもらえてません！

Give me アンケート！

なんの脈絡もないですが、それではどうぞ！

10話 ウィンタルの街

「人多くね!？」

俺は街を見つけてから、大体10分くらいかけて街の門のところまで行った。

門は縦幅10メートル、横幅5メートル程度の大きさで二枚の扉が左右に開くようになっていた。

近くで見ると凄く迫力がある。

重厚そうな扉が嚴重に閉められて（…………）おり、なんか威圧感がある。

「…ん?なんで閉められてんだ?」

その扉の脇に厳ついおっさんとヒョロいノツポが立っていた。

鎧と剣を装備してるから門番だと思うので、近くに行き、話しかける。

「あの、すみません」

「ん?どうした坊主」

2人の内の厳ついおっさんのほうが反応してくれた。

良かった。なんか優しそうで。見た目ゴツいけど。

「いや、街に入りたいんですけど、ダメですか？」

「ああ、大丈夫だぞ。安全の為に閉めてるだけだからな。坊主、旅か？」

へえ〜案外すんなり入れるもんなんだな。

「ええ、まあ」

「そうか。旅にしちゃ軽装だな。なんか旅に必要な物でも買いに来たのか？」

俺の今の装備は、出るときにもらった服一式と、荷物が入った袋（空間魔法使用済み）を背中に背負い、腰の後ろに件の刀くだんを携えている。

確かに旅にしちゃ軽装かもしれん。

「ええ、そんなところです」

「そうか。まあゆっくりしていけよ。お〜い！門開けろ〜！」

なんかいい人だったな。

つかノツポさん、最後まで空気だったけど、いた意味あったのか？

そんなことを思考しつつ、門を見る。

重厚そうな門がゆつくりと開く様は迫力があつた。

さてこの門を越えたら、どんな人に会うのだろうか。
門が開ききつた。

「そいじゃ、ようこそウィンタルの街へ」

俺はおっさんに礼を言い、門をくぐる。

さて、なにがあるのかな？

）．）．）．）．）．）．）．）．）．）．）

門をくぐった俺が最初に見たのは幅7メートルほどの通りと通りの脇にとろろ狭しと並ぶ出店とたくさんの人々だった。

通りをずっと目で追っていくと、突き当たりに少し小さい城のようなものが見える。

「これが…ウィンタルの街…」

俺は、この世界に来て始めてみた街とたくさんの人たちに感動すら覚えた。

本当にたくさんの方がいる。

犬の耳と尻尾が生えている人や猫耳がついた人。なんか狼っぽい人もいる。獣人と呼ばれる人たちだ。

「うわぁ…すげえ…始めて見た…」

興味津々だったが、ガン見するのはさすがに気が引くのでさっさと足を進める。

俺は人の間を縫って通りを進みながら、様々な店を見て回る。

果物を売る人や魚を売る人、骨董品みたいなのを売ってる人もいる。

みな自分の店に客を呼び込もうとして、声を張り上げている。

ちよつとうるさいくらいだ。

「すごい活気だなあ…。ん？あれは…」

俺の視界に入ってきたのは、少し向こうところの路地裏の入口付近で数人の男に絡まれている白い猫耳と尻尾を生やした獣人の少女だった。

「おいおいマジか…。街入って早々これかよ…。近くの奴、誰も気づいてないのか？…くそっ！」

俺は人混みのなかを無理矢理進んで少女の所へ向かう。

く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く

私は大通りを普通に歩いていた。

ここはいつ来ても活気に溢れている。

この通りの雰囲気が好きなのでちよくちよく来るようになった。

しかし、路地裏は最悪だ。

通りの明るい雰囲気に対して、どんよりとした重い空気が流れている。

しかも悪い噂が絶えない。

誤って入り込んだらすぐに囲まれ、お金を要求してきたり、最悪、可愛い女の子や小さい子どもなどは誘拐され人身売買される可能性もある。

まあよほど奥のほうに行かなければ、の話でしょうけど。

そんなことを考えつつ、店を物色していく。

すると人がぶつかって来て路地裏への入口のほうへ押し出されてしまった。

「きゃっ…!」

ドンッ!

すると路地裏の入口の所に立っていた人にぶつかってしまった。

「あっ…!すみませ…!」?

そこに立っていたのは明らかに柄の悪い奴らだった。

「おおっと!なんだ嬢ちゃん。人の顔見て固まっちゃまってえ。惚れ

「ちまったかあ？ギャハハハハ！」

1人の男が笑いだすと、回りの男たちも笑い始める。

「気持ち悪い。」

私はすぐに通りに戻ろうと歩き始める。

するとさっきの男が腕を掴んできた！

「！？いやっ！」

振り払おうとしたが払えなかった。それどころか、さらに強い力で掴んでくる。

「…痛っ！」

「おいおい嬢ちゃんよお。なに逃げようとしてんだあ？まだお兄さんとお話してようよ！ギャハハハハア！」

男が再び下卑た笑い声を上げると回りの男たちも獰猛な笑顔を作りながらさらに笑う。

「いやっ！離してっ！」

私は恐くなり、目尻に涙を浮かべながら必死にもがく。

しかし全然離れない。

「嬢ちゃんよお。んなやかましい通りなんか楽しくねえだろ？だか

ら兄ちゃんたちと楽しいことしようぜえ！」

「いやあああ！」

私は路地裏に引き込まれていく。

少し奥まで来てしまい、もうダメかと思ったその時！

「おい、その子を放せ」

怒気を孕んだ男の人の声がした。

）．．．）．．．）．．．）．．．）．．．）．．．）

俺が駆けつけたとき、少女は腕を強く掴まれ、路地裏の奥へ連れ込まれていた。

1人は少女の腕を掴みながらニヤニヤと笑っていて、それを取り囲むように3人の男たちがおり、少女は泣きながら離してと叫んでいた。

ブチッ！

俺の中で、何かが切れた。

「おい、その子を放せ」

自分でもびつくりするほど静かに、それでいて、怒気を含んだ声で男たちに話しかける。

少女は泣きながらこちらを見てくる。

その目には、多大な恐怖と若干の安堵入り混ざっていた。

さらに、怒りが増した。

「ああ？んだてめえ？」

少女の腕を掴んでいる、頭の悪そうな奴が言った。

「聞こえなかったか？その子を放せと言っている。そんなことわからんほど、お前はアホなのか？」

「っ！？てめえ…！」

安い挑発に乗るものだ。

周りの男たちも怒気を含んだ目で睨んでくる。

「お前が怒るのはお門違いだと思っが？」

「うるせえ！てめえ何様だ！」

こいつは人の名前を聞くときは自分の名前を言ってからといつこと習ってないのか？

「別に何様でもいいだろう」

「ああ！？」

ふっ、まあいい。

「とりあえずその子を早く放せ、チンピラども」

「んだとゴラア!？」

「てめえ、やんのか!？」

「ぶっ殺されてえみたいだな!？」

「おい、やっちまおうぜ!」

一斉にナイフを装備する男たち。

はあ……ここまで典型的な三下の台詞を言つとは……。

「……………(スッ)」

目を細め、相手を睨み付ける。

少女を拘束したやつ以外の野郎共が一斉に構える。

俺は至つて自然体だ。

「……………来い」

言つと同時に少し殺気を浴びせる。

するとみな一様に身を固まらせる。

「うっ…うおおおお！」

一番手前のやつが雄叫びと共に飛びかかってくる。

…遅い。見切るまでもない。

「ふんっ！」

飛びかかってきた相手の顔面に手加減無しの裏拳を一発入れる。

バキィ！

「うっごあー！」

相手はふっ飛び、壁に叩きつけられて気絶した。

少女と男たちは目を見開いて驚いている。

かくいう俺も自身の力に少し驚く。

今までディオス以外の人間と戦ったことがなかったので、どれだけ強いかわからなかった。

とりあえず、チンピラ程度なら本気を出さずにボコれるらしい。

「うっうわああああ」

そんなことを考えていたら残りの2人が一気に襲いかかってきた。

まず近いほうの奴のナイフを持つ手をいなし、ボディープローをお

見舞いし、そこから回し蹴りをして、先ほど気絶させたやつのはうへ飛ばし、またもや壁に激突させて気絶させる。

そしてもう一方は手首を叩き、ナイフを落としてつつ相手が突進してきた勢いを利用し、一本背負いの要領で背中から地面に叩きつける。

パンツパンツ！

手をはたいて残りの少女を束縛している男を睨む。

「さて、後はお前だけだ」

男はあっという間の出来事に目を丸くしている。

「ハッ！？て、てめえよくも！」

「この状況でよくそんなことが言えるな」

そう、もうこの男1人しかいないのである。

手際よく3人の男を倒した奴に1人じゃ敵うはずがない。

チャキツ！

「……………」

「！？」

「へへへ、動くなよ？動いたらこいつの首かつ切るぜ？」

男はそれを悟り、あるうことか少女の首にナイフを突きつけた。

「……………るよ」

「あ？」

「やってみろっつってんだよ」

「！？」

少女が息を呑む。

「て、てめえ嘘だと思ってるのか！？だったら「ただし、その少女を傷つけた瞬間：お前の命、なくなると思え」はあ？てめえこそこの状況でよくそんなこと言えんなあ！」

なら…状況を逆転させればいいのだろうか？

ザッ

「てめえ！こっち来んなよ！」

ザッ

「本気でコイツを殺すぞ！？」

ザッ

やってみろよ

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

ゴオオオオオ!

いきなり、辺りに突風が吹き荒れ、棕の髪が銀色に変化していく。

少女と男は唾然としてそれを見ている。

男はびっくりしすぎて少女を持つ手を離している。

「お嬢さん、こっちに来るんだ」

「!?!? は、はい!」

走ってきて俺の後ろへ隠れる。

男は思考が停止していて動かない。

「俺を怒らすとどうなるか…思い知らせてやるっ」

棕は右手をかざし、徐々に手のひらを閉じる動作をする。

物質変化で空気中の水分をかき集めているのだ。

そして集めた水分で何十本もの水槍を作り、男の周りを囲む。

「降参してとつとと失せろ」

「!?!? は、はいiiiiiiiiiiii!?!?!」

男は気絶している奴らを抱え、すばらしいスピードで逃げ去って行く。

「他愛もないな……。さてお嬢さん大丈夫か（ふらっ…）っ」と

お嬢さんは、男が去って安心したのか、気を失ってしまった。

「ふう…怪我はないみたいだな」

それよりも…

「この子どろっしよっ…」

路地裏で途方に暮れるのだった

10話 ウィンタルの街（後書き）

ああ疲れた

ご意見要望ご感想お待ちしております。

11話 猫の少女(前書き)

最近またボカロにハマリ始めた作者です。

ええ曲いっぱい。

あ、そういえば。

アンケート、是非とも答えてもらいたい。

未だ1人です。

悲しくて泣きそうです。

そんなわけで、どうぞ。

11話 猫の少女

「展開が急!？」

その後、とりあえず少女を背負い、宿屋まで行った。

宿屋まで来る途中、周りから奇異の目を向けられたけど、我満。

カラン、カラン

「あ、いらっしやうい」

中には20歳後半くらいの、髪を後ろで束ねた女性がいた。

「すみません、泊まりたいんですが…」

「はいよ。2人で1部屋かい？」

人の良さそうな笑みを浮かべて聞いてくる。

良かった、詮索されなくて。

「はい」

「わかったよ。階段上がって右手の二番目の部屋だ。その子、落とさないように気を付けるんだよ」

鍵を渡しながら今度はいたずらっぽい笑みを浮かべて言うてくる。

「うん、可愛いなこの子」

普通に可愛いかった。

ディオスは可愛いと言うより、美人だったので、可愛い子はなんか新鮮な感じがする。

そんなことを思いつつ、少女の顔をぼくと眺めていた。

「……………う……………」

あ、起きそつ。

「……………あれ？ここは……………」

ドクエのNPCの様に言ってみる。

「ここは宿屋だよ、お嬢さん」

「!?!?わにゃあ!?!?」

なんか顔見て凄じびっくりされた。ショック。

「……………俺の顔はそんなに恐いだろつか?」

「ふにゃ!?!?あああ、すすすすみません!?!?! 決してそう言う意味で驚いたのではないです!?!?はい!?!?!/?!?!/」

なんか面白いな、この子。めっちゃ顔赤い。そして猫っぽい。あ、猫

「(クスッ)わかってる、冗談だ。さて、自己紹介しようか。俺は

篝日 椋。椋が名前で篝日が姓だ。気軽に椋と呼んでくれ。よろしく」

「リヨウさん：ですか？わ、私はメルト・ライエンスと言います！あの、助けていただいて、ありがとうございます！」

元気のいい子だな。

「気にするな。俺がしたくてしたことだし。君が無事だったならそれでいいさ（ニコツ）」

微笑んでメルトを見る。

「！！／／／ いえ、それでもです！本当に恐かったので…」

まああんなことになりやあな。

「うん、まあ助かったんならよしとしようじゃないか。それより顔赤いけど、どっか怪我してたか？」

「い、いえ！／／／ とにかく！本当にありがとうございます！」

土下座せん勢いでお礼言われてもな…。

「そついやメルト、家は？帰らなくて平気？」

「ええと、私、旅して回ってるので…。この街は雰囲気が好きなのでたまに来るんです」

頬を掻きながら言うメルト。

「そうなのか。俺も旅しててな。ちよつどこに寄つたんだ。あ、宿はどうしてるの？この宿、勝手にとっちゃったから代金は俺が払うけど」

金あんまりないけどね。

「まだ宿はとってないですけど…わ、悪いですよ！助けてもらった上にお金まで払ってもらうなんて！」

「気にすんなよ」

「気にします！折角だしここに泊まります。お金は自分で払いますから！」

「そ…そうか？」

なんか勢いが凄い…。

「ちよつともう1部屋借りてきやす！／／／」

ダダダダッ！

噛むと同時に凄く速さで出ていった。

そんなに俺と同じ空間にいるのが嫌だったのか…？

く…く…く…く…く…く…く…く…く…く…

私は部屋の前でまだドキドキしている胸を押さえていた。

この鈍感野郎はそんなことを考えながら「ちよつと待てえい！」なにか？

「てめえ、なに変なこと書いてやる！」

なにつて…真実？書いててムカついたし…。てゆうかメタ発言はやめなさい。世界観が崩れる。

「お前が変なこと書かなかつたら物語は平和に続いてたわ！つうか自分の小説の主人公に嫉妬するな！」

おいおいこの私を誰だと思っている？変なこと書いても物語を平和に繋げるのが作者こと私の得意技だぞ？そして誰にでも、何にでも程よく平等に嫉妬するのが私だ。

「んな特技と平等意識、意味ないわ！とにかく即刻もとに戻せ！いない！？」

はいはい。

）・）・）・）・）・）・）・）・）・）・）

メルト遅くね？

そんなことを考えながら、俺はメルトの帰還を待っていた。

出ていってから、30分近く経っているが、一向に帰ってくる気配が（コンコン

誰かがドアを叩いた。たぶんメルトだろう。

「開いてますよ〜」

ガチャツ

「し…失礼しますっ!」

やはりメルトだった。

なんでそんな意気込んでんの?さっきまでいたところなのに。

「ずいぶん遅かったな。なんか手間取ったのか?」

するとメルトは

「うっ…ま、まあそんなところですよ／＼」

なぜ詰まった。そしてなぜ赤くなる。

「ふうん…。あ、そうだ!メルトさ、なんか手っ取り早く金稼ぐ方法知らない?」

「え?お金?そつですなえ……………ギルドなんかどうですか?依頼があればすぐに行けますし」

ほうほう、この街にもあるのか…。

ギルドの存在はディオスから聞いていたので知っている。

登録はもちろんしてないから詳しいことは知らないけど。

「ギルドの登録ってさ、いつでも誰でも出来るの?」

「はい、確か出来たと……ってどうかギルドに登録してないんですか?旅をしているのでとつくに登録されていると思っただんですが……」
森のなかにギルドなかったしな。

「いや、旅を始めたのは最近でね。まだ登録してないんだよ。てか旅人は大体登録してんの?」

「旅人……というか冒険者ですが、大体はそうだと思いますよ?手っ取り早くお金が手に入りますし。旅をしていると、なにかとお金を使いますから。ほら、私も登録してます」

そう言っで見せてくれたのは、手のひらに収まるサイズの白いカードのようなものだった。

「それは?」

「これはギルドに登録した冒険者に渡されるギルドカードです。これを持ってしていると、冒険者と証明できます。えっとお……もしかしてギルドのこと、ほとんど知りませんか?」

ブンブン!

勢いよく首を縦にふる。

「そ……そうですか。わかりました。では色々と説明しますね」

「おう！よろしく！」

これは良かった。ちょうどギルドのことについて知りたかったし。

「まずこのギルドカードは色分けされています。カードの色でギルドランクがわかるようにするためです。まず一番下のDランクが黒、続いてCランクが白、それから、Bランクが青、Aランクが赤、Sランクが銀と続きます。そしてSSランクが金色です。Aランクまではわりと人が多いのですがSランクから上は滅多にいません。たしか一番新しいSランクが出たのは十数年前だったと思います。そしてSSランクは大陸中をさがしてもいるかいないかくらいだともいます。SSランクが出たのはもう何十年も前の話なので……」

今はじじいorばばあになっているということだな。

「それからランクに応じて受けれる依頼は変わります。大型の魔物なんかはBランクから上ですね。別に低いランクの人が高いランクの依頼を受けてもいいのですが、その場合、死亡してもギルドは責任を負いません。だから依頼するひとはいないんです。…こんなところでしょうか」

うんうん、だいぶギルドの仕組みがわかったぞ。

「おう！ありがとうな、メルト！」

そうやってメルトの頭を撫でる。

「いえ……………// // //」

メルトも恥ずかしがりながらも気持ち良さそうに目を細めている。

「よっし！早速ギルドに登録しにいこう！」

俺は立ち上がってメルトの頭から手を離しながら言う。

「あ……………」

メルトは名残惜しそうにしている。

「メルト、ここのギルドの場所知ってるか？」

「え？あ、ああはい。知ってますよ。案内しましょうか？」

お、ラッキー

「んじゃ頼むわ（ニカッ）」

俺は笑顔を作りながらメルトに頼む。

「は、はい！任せてください！／＼／」

おおっ、急に元気良くなったな。

こうして、俺とメルトは、ギルドへ足を運ぶのだった……

11話 猫の少女(後書き)

ういゝ本日二作目ゝ。

今日の夜も出来たら更新するぜえゝ。

ご意見要望ゝ感想お待ちしてます。

12話 冒険者とギルド（前書き）

本日二度目の更新！

はっきり言って疲れた（・ー・・）

けど、楽しみにしてくれている人達のために頑張ってみる！

おらに元気をわけてくれ！

そんな感じで、どうぞ。

12話 冒険者とギルド

「恐っ!？」

今、ギルドへ向かうために通りを進んでいる。

ふと、メルトに疑問を投げ掛ける。

「そーいやずつと気になってたんだけどさ。あのちっさい城、なんぞ?」

そう言っ指差したのは通りの正面にあるサイズの小さい城。

ウインタル(ここ)に来てからずつと気になっていた。
たぶん領主の屋敷とか…

「あああれがギルドですよ?」

「うそぉ!？」

マジでか!？あんなデカイの!？

「(クスツ) はい嘘です。あれはここら辺の領地の領主様の館ですよ」

メルトは悪戯っぽい笑顔を作りながら言ってくる。

「こんにゃろっ!……からかいやがったな〜!」

「あはは！すいませんっ！」

くそう…可愛いから許しちゃうじゃねえか！

これが元の世界のあいつだったら、頭頂部の髪の毛を毛根から抹消するくらいで許してやらんこともないな…うふふ腐

おおっと、若干思考がブラックになっていたな。

いかんいかん

「リヨウさん？着きましたよ？」

「おおいつのまに！」

俺の目の前には黒い壁と扉、そしてその上に交差した剣が書かれている建物があつた。

扉は開け放たれており、様々な冒険者が出入りしている。

「さ、早く入りましょう」

「おっ」

俺たちは、ギルドの中へ足を入れた。

く…く…く…く…く…く…く…く…く…く…

ギルドの中はすごい賑わいを見せていた。

色々な人が忙しく動いている。

それでも、かなり広いので割りとスムーズに動いているようだ。

「なあ、受付ってどこだ？」

「あそこですよ」

そう言っつてメルトは奥のカウンターを指差す。

「んじゃあさっさと登録してくるから待っつといて」

「はい！」

うん、元気の良い返事だ。

そう思いながらカウンターへと向かう。

途中、何度か人にぶつかりかけながらも、無事カウンターにたどり着けた。

カウンターにはポニテの女の子とメガネをかけた女の子の2人がいる。

とりあえずポニテさん（仮）に話しかける。

「あの、すみません」

「！…はい、なんででしょうか？」

なんか一瞬目が見開かれたけど、凜とした声で対応された。

なんか知らんけど、背筋を正してしまう。

「ギルドに登録したいんですけど」

「わかりました。説明はいりますか？」

「いや、大体わかってるんで、いいです」

メルトが懇切丁寧に教えてくれたしな。

「それでは、こちらの書類にご記名ください」

そういつてなんか紙を渡される。

箒日…っと漢字で書きかけた。

苗字と名前も逆にしないとな。

リヨウ・カガリビっと。

ん？ああ、天使の翻訳（能力に非ず）のお陰で文字の読み書きもバツチリだぜ。

そうして、書き終えた書類をポニテさんに渡す。

「承りました。少々お待ちください」

「うーい」

自分でもすんごい気の抜けた返事だと思う。

だからスルーしてくれ。

〳二分後

「お待たせいたしました。こちらがカガリビ様のギルドカードになります」

おお、案外早かったな。

「ありがとうございます(ニコッ)(」

笑顔でお礼をする。

「！／／／い、いえ／／／そっそれより、依頼は受けられますか？」

ポニテさん、顔赤いけど、大丈夫か？

「いえ、またにします」

「わかりました。またのお越しをお待ちしています」

さてと、メルトのところへ向かうか。

〵・〵・〵・〵・〵・〵・〵・〵・〵・〵・〵・〵

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

能力の出し惜しみなんかしない。

俺は《光適性》で得た光魔法を存分に発揮した。

光魔法と物質変化のコラボで身体を光に変え、一瞬で男の横に行き、腕を叩いてメルトから離させ、裏拳を思い切り決め、ぶっ飛ばす。

ここまでに一秒もかかっていないだ。

周りも啞然としている。

そりゃそうだ。

いつの間にか大柄の男と銀髪の男が入れ替わって、大柄の男は壁際に吹っ飛んでるんだから。

まあそんなことはどうでもいい。

俺はメルトに声をかける。

「さあ帰ろうか、メルト」

メルトもびっくりした顔をしている。

しかしすぐに輝く様な笑顔で返事をくれる。

「はいっ！」

ふっ、いい返事だ。

さあ帰ろうというその時、

「てっ、てめえ！よくも俺様の顔に傷を！」

ああさっきの変態か。あれで気絶してないとは…タフだな。

「てめえ、覚悟はできてんだろうな！この俺様に…」

ウルサイナア…

「…いい加減黙れよ？」

ジャラララララッ！

右手から光の鎖を出して男を拘束する。

「次メルトに手え出したら…」

バチッ！バジジジジッ！

左手に電気を帯電させる。

光からの派生だ。

「……………クロス」

ビシャアアアアッ！

男の周りに極小の雷を連続で何本も落とす。

男は泡を吹いて気絶していて、周りの人は顎が外れんばかりに口を開き、目を見開いて固まっている。

俺は光の鎖の拘束を解き、メルトに帰ることを促す。

「メルト、行こう」

「……………」

どうやらメルトも啞然として固まっているようだ。

俺はメルトを引きずってギルドを出る。

俺達が出て行っても、周りの人は固まったままだった。

それからみんなが再起動したのは、10分後であった。

後にこのことは、『閃光の白銀』最初の騒動として語り継がれることを、俺はまだ知らない。

12話 冒険者とギルド（後書き）

今日最期の投稿じゃ〜！

疲れた…。

流石に勉強返上して書いたのは不味かったか…。

ご意見要望ご感想お待ちしております！

13話 能力説明会（前書き）

自分でもよくわからんサブタイつけたと思う。

どうも。作者です。

先日、アンケートについて言ったら答えてくださったかたが数名いらっしまったので超嬉しいです。

ユ一様、理系学生様、m i y a b i 様、ご協力感謝します！

しかしまだ4人しか答えてくれてません。

しかも3が有力候補…というか3しか票が入ってません。

もっとアンケートに答えて欲しいな！

それから、池宮樹さん、詳しいアドバイスをしてくださってありがとうございます！

さっそく試してみたいです。試せるかどうかは別として。

そんなわけで、どうぞ。

13話 能力説明会

「めんどくさっ!？」

あのと、メルトは宿屋に着くまで放心状態だった。

そして宿屋に入った瞬間、放心状態から回復し、まー質問しまくって来るわ。

なにが起こったんですか!?! やてゆーか何したんですか!?! 能力ですか!?!...とやかましいこと、やかましいこと。

あまりにも煩いので眠らせました。

え?どうやって眠らせたか?...聞きたい?うふふ腐...

ハッ!?! いかんいかん、また思考がブラックになってしまった。

とにかく、各自自由にご想像くださいってことで。

そんなこんなで現在、メルトの部屋に(勝手に)入って、メルトをベッドに寝かせている。

そっぴや最初もこんな感じだったなあ...最初つつつか今日のことなんだけれども。

なんかすごく濃い一日を過ごしてるな...。

知ってるか?二話前から一日も変わってないんだぜ?

作者もびっくりだよ。

……なに考えてんだ？俺……。

しかし今日の昼間にメルトが襲われてるのを助けてからが、忙しかったな。

助けて、宿とつて、メルトと話して、ギルド登録して、メルトまた絡まれて、キレて、十秒かからずノックアウトして、帰ってきました。

うふ、超ハード

あかんわぁ…疲れてキャラが崩れてきた……え？口調も崩れてる？そいつはすまない。

しかしなかなか起きらんな…強くしすぎたか？

ん？マジでなにしたんだ？

うふ、うふふふふふ……。

アトモドリデキナイヨ？

やめとくって？

うん、懸命だな。

「うーん……ハッ!？」

あ、やっと起きた。

秘術、責任転嫁！

「まったく……起きるの遅いよ？」

「え？ああすいません……じゃなくて！リョウさんが昏倒させたんでしょ！？」

秘術破れたり。

「こやつ、強い！？」

「なにが強いですか！どうどう責任転嫁した人がよく言いますね！」

あ、声に出た。

「いや、すまん。俺の口が勝手に……。まったく……誰だ？俺の口を動かしたのは……」

「知ってます？全身の機関は脳の命令で動いてるらしいですよ？」

あるえ？なんでそんな（余計な）こと知ってるの？

「まあ、そんなどうでもいいことは「どうでもいいこと！？」「置いといて」「置かないください！」「ええい、人が話してるときに話すな！」「逆ギレされた！？」「なんか聞きたいことがあるんじゃないのか？」「無視！？」「んでどうなんだ？」

「……………」

あらら黙っちゃった。

「ごめんごめん、そんな怒るなって。許してくれよ」

ナデナデ

メルトの頭を撫でながら謝ってみる。

「ふにゃあ〜…／＼／＼って撫でるなあ〜！／＼／」

お顔を真っ赤にして怒った。

これでもかかってくらい赤いな。

「すまんすまん」

「はあ…もういいですよ…」

よし許してもらえた。

「その代わりに、さっきのこと、詳しく説明してください」

「大丈夫、もとよりそのつもりだ」

あんだけしたら流石に説明するわ。

「じゃあよろしくお願いします」

「おつよ。さてどこから話そうか…」

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

さあみなさん（読者）、みなさんの頭の中にはある疑問が浮かんだはずでは？

そう…。

Q・お前、いつからそんなに能力を使いこなせるようになった!?

…と。

それについてはこうお答えしよう。

A・修行した

え？ふざけんな？もっと詳しく説明しろ？

はいはいわかりましたよ。

まず俺は修行をしているとき、こう思った。

「そうだ、能力を練習しよう！」

まあいきさつはこんな感じ（あゝ？

嘘ですごめんなさいちゃんと説明します。

ゴホン……まあそう思った俺は、ディオスとの修行が終わったあとに自主練習してたわけだ。

でもやってるうちにあることで行き詰まった。

俺がこの世界で唯一使えるらしい光魔法の活用法だ。

一見、光というと強そうなイメージがあるかもしれない。

しかし実際は不便極まりない。

なんせ光は実体を持たない。

精々、光で目を眩ませる程度だ。

唯一攻撃できそうなレーザーまたは熱線は、圧縮や熱を持たせることが非常に大変。

下手すりゃ圧縮させるだけで精神力をすり減らしてぶっ倒れるし、

熱を持たせることは出来ても、自分の防御が出来ず、焼け死ぬ。

それほどまでに大変 & a m p ; 危険なのだ。

だから俺はそれをどうすりゃいいかひたすら悩んだ。

そしてある日、練習用の剣を振るうかと思い、剣を握もうとしたら、金属の部分の近くでバチツ！と音がした。

少し傷みを感じ、手を引つ込めたとき、ああ静電気か…と思った。

そこで俺はあることに思い至った。

アレ……？そっぴや電気って、発光してね？と…。

うん、いいこと考えた。

私は2つの能力を同時に行使することにした。

物質変化と光適性だ。

光を物質変化させ、電気を作る。

最初から使えよとか言っつな。

忘れてたんだ。

そして、もしかしたらいけるかも……と思い、試したら、案の定成功した。

テンションが、MAXになった。

1人で奇声をあげていたら、ディオスがすっ飛んできて、うるさい！、と俺の頭を容赦なくぶん殴り、俺を黙らせた。

頭がかち割れるかと思ったと、記述しておく。

それからディオスに光魔法の活用法が見つかったことを言い、その方法を言ったところ、苦笑と呆れの混ざった目を向けられた。

いよいよ規格外の域に近づき始めたか…と。

思いの外、その目線は心を抉った。

ピュアな少年にそんな目を向けんな！

…おい、誰だ？今「ピュア」の部分で鼻で笑いやがったの。

出てこいy(ry

閑話休題

とにかくそんな感じで、まず電気を活用することを覚えた。

そして発光をヒントに考えたところ、そーいや古代の人って焔で闇を打ち消して来たんだよね、と思ひ、熱からの防御結界(強)を

張り、四大元素の火のような弱そうなイメージでなく、地獄の業火や烈火の焰をイメージし、光魔法の補正付きの火魔法を行使したところ、小屋の横の木々が全焼、地面はドロドロに溶け、一部ガラス状になっていた。

俺のすぐ足下の結界の方までドロドロになっていたので、冷や汗を大量に流しながら、結界強力にしようとして良かったと安堵していた。

しかし安堵するにはまだ早かった。

激怒したディオス（と言う名の魔王）の存在である。

あ、おわた…。

それがその日最後の言葉だった……。

それから物質変化は物質を自在に変化させれるんだから自分を光に出来るんじゃない？と思い、試したところ、一発成功。

試しに少し動いてみたら、そりゃ早いこと早いこと。

世界を置き去りにしたようだった。

楽Cー！とまた、テンションMAXになり、はしゃいでいたところに魔王登場。

冷や汗ダラダラでその場に固まってしまった。

え？光速で逃げろって？

お前、あの、人を殺せる勢いの眼力をどう無視しろと？

あれはダメだ。例え神でも逃げれんと思う。

んで、攻撃されるのを目を瞑って待ってたら、いつまで経っても攻撃が来ないので目を開けてみると、俺の頭を殴ろうとしてはスカっているディオスが目に入った。

別に、ディオスがスカってる訳じゃない。

ディオスの拳が、俺の頭を通過しているのだ。

そして攻撃されないとと思って、わざとディオスに近づいて行ったら、発動が解け、おもいつき振りかぶった一撃を受け、昏倒した。

たぶん光化は時間制限があるんだな…。

そんな教訓を得た日だった。

と、まあこんな感じにきっかけを見つけ、（主に制御の面で）修行を行った。

おかげで、一応全属性は扱えるけど、特に光（は当たり前）と火（実際は焰と言うほうが正しい）に強い適正が出た。

なので光と火属性の魔法を重点的に練習して、今に至る…。

く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く

「…とまあこんな感じ？」

なんか驚きに固まってるっばい。

「え〜っと、リヨウさん？あなたは人間ですか？」

「当たり前じゃー！バリバリで人間道を通っ走つとるわい！」

おっと、ついジジイのしゃべり方になってしまった。

「アハ、アハハハハ。そうか……リヨウさんは人間じゃなかったのか……」

「いや俺バツチシ人間だったよね！？」

「そーかそーか……だからあんなに強いんだ……うふふふ……」

ちよ、なにこれ怖い。

そんなこんなで、夜通し説明する羽目になり、自分の部屋に戻ったのは、日にちが替わった大分あとだった……。

13話 能力説明会（後書き）

ハア疲れた。

アニメイト行って東方グッズ一杯買ってテンションMAXだったのに、小説を間違って二回消してテンションがどん底になりました。

鬱だ…死のう…。

まあ死なないけどね！

ご意見要望ご感想お待ちしてます。

14話 初依頼 (1) (前書き)

眠い……。

おやすm……こんにちは、作者です。

今回はがつつり内容がわかってしまうサブタイを付けてしまった。

いかな……。

寝ぼけてまともなサブタイが付けね……え？今までにまともなサブタイを付けたのかつて？

さあ？

さて、池宮樹様、アンケートにご協力してくださりありがとうございます！
います！

もっと、もっとアンケートをPLEASE！

それでは、どうぞ。

14話 初依頼 (1)

「いや、なんで!？」

眠い……。

え?作(ピー)とかぶってる?知らねえよ。

とりあえず、おはよう。

惊だ。

昨日、夜通しメルトに説明したため、凄く眠い。

まあ納得してくれたようだから、良かった。

しかしまだメルトとは昨日会ったばかりなんだよね。

「どんだけ濃い1日を過ごしたねん!と関西風のツッコミを入れられてもおかしくはない。」

ん?そもそも関西人がいないんじゃないかって?

言っな……。

さて今日は何をしようかな……。

ガチャ

「おはようございます！あ、起きてましたか」

そんなことを考えていたら、メルトが部屋にやってきた。

「おうおはようメルト。どしたの？」

「いえ、リヨウさんを起こしに来たんですけど、起きちゃってました」

微笑みながらそう言うてくる。

カーテンの隙間から射し込む朝日が、メルトの白い髪に反射し、キラキラと綺麗に光る。

うん、美少女だから絵になるなあ……。

「リヨウさん、食堂で朝ごはんを一緒に食べませんか？」

「おおいいぜ。先に行つててくれ。着替えて、装備を整えてから行く」

「はい、それではまた後で」

ギィ、バタン

メルトは扉を閉めて出ていった。

昨日いつ着替えたのか？

実は昨日、話が終わって、部屋に帰った瞬間、瞬時武装変換の魔法を使った。

今もこれを使い、寝間着から、旅の装備に換える。

これは本来、自身の武装を瞬時に切り換える…というか呼び出す魔法だ。勿論、任意で今の武装を送り、他の武装を呼び出すこともできる。

相手のタイプに合わせて装備（道具や防具）を換えたい時や、剣が折れた時などに切り換えるなど、非常に重宝する、割りとポピュラーな魔法である。

でもこの魔法は刻印式なのであらかじめ換えたい装備品に刻印を刻まなければならぬので結構面倒くさい。

しかあし！

実はこの魔法、凄く万能なのである！

街で大量に買い物をしてしまって、持って帰れない！

そんなときに瞬時武装変換の活躍である。

あらかじめ、刻印が印してある紙などを買い物に張り付け、お店の人に預けておき、帰ったとき、買い物と呼び出せばいいのだ。

さらに俺がしたように、寝間着に刻印を印し、着ていた服と変換して、そっこーで寝ることもできる。

風呂はどうしたって？

ふっふっふ…。

この世界には便利な魔法があるのだよ。

その名も！！

生活魔法（大山 ぶ代風）

……………ゴメン。

とにかく！この世界には生活魔法が存在する。

その名の通り、生活面をサポートする戦闘能力皆無の魔法だ。

主に、身体を清めたり、汚れを落としたり、服の解れを直したり、料理の味付けを程よくしたり、新鮮な野菜を見極めたり……と、主婦感バリバリの魔法である。

たぶん、この世界の奥様方は重宝しているだろう。

まあ俺はそれを使い、体を綺麗にしたってわけ。

てゆうかこの世界の住人はみんなそうしてる。

風呂なんて概念がないからな……。

ディオスのところでもこの魔法を使っていた。

なんか最初に教えられた魔法がこれだったので、印象に残りまくっている。

なんか生活するに当たって絶対に必要だとか必至に熱弁してたから。

おっと、そんなことを考えてたら少し時間が経っちゃったな。

早く行こう。

く食堂

おお、結構賑わってる。

メルトは……と……。あ、いたいた。

「すまん、遅くなった」

「気にしてないですよ。今さっき、料理が来たのでちょうど良かったです。あ、リヨウさんの勝手に頼んじゃいましたけど、よかったですか？」

「お、ありがたい！んじゃ食べようか」

俺達は食べながら、今日の予定について話し合う。

「今日、どうしようか」

「うん……リヨウさんってまだ依頼を受けてないですよね？」

ああ、めんどくさかったしな。

「おうよ。んじゃ、初依頼に行きますか」

「はい。なら早く食べて、ギルドへ行きましょうか」

「わかった」

く……く……く……く……く……く……く……

こんにちは。

私はギルドで受け付け嬢をしているミリア・テストミスと申します。

くっ！あゝ堅い堅い！

口調崩そくつと。

改めてじこしょーかい！

あたしの名前はミリア・テストミスだ！よろしくな！

あたしの特徴は、ポニーテールと自慢の赤髪だ。

仕事中は礼儀正しくしてないといけないからあんな口調だけど、素はこつちだから、こつちで話すぜ！

勿論、今も仕事なんだけど、誰も来ないし、心ん中だから大丈夫だろ。

あゝそれにしてもほんとに誰も来ないなあゝ……。

昨日の人とか、来てくんないかな…。

ん？ああ、昨日ここで男を鎮圧した、白銀のイケメンのことだよ。

実はな、あたし、あの人に恋しちゃった。

一目惚れ…だったのかなあ、うん…。

昨日受け付けしとるときに話しかけられて、顔見たときに、一瞬、「うわ…かっこいい…」って声に出しかけたけど、気合いで抑えた。最初は、まあ、かっこいいし、物腰柔らかいだから、こういう人と付き合いたいなあ、くらいだったけど、ギルカ（ギルドカードの略）渡したとき、微笑みながらお礼を言われて、うん、落ちたね。

し、仕方ないだろ！？／／／

異性の、しかもイケメンからそんな笑顔を向けられたことなかったんだ！

しかも、反則だろあれ！？

あの顔で（決して貶しているわけではありません）あの微笑みだけ！？

誰でも落ちるわ！

まあそれから、顔が熱くなるのを感じながらも職務をまっとうした。

そして、彼の後ろ姿をぼくと眺めていたら、立ち止まって、目に見えるんじゃないかというほどの膨大な魔力を全身に纏ったかと思ったら、次の瞬間、彼の姿は消えて、気づいたらさつきまで獣人の女の子に絡んでいた男が立っていたところだった。男は吹っ飛んで

たし。そして彼は女の子になにか言っている。

いきなりすぎてなにがなんだか理解出来なかった。

同僚も、冒険者たちも、目を丸くしていた。

特に驚いたのは、髪の色。

さっき、あたしと話していたときは、確かに黒髪だった。

しかし今はどうだ？

………なんで銀髪やねん！

なんだろうこの口調…。

親近感が湧く…。

とにかく、なんか綺麗な白銀の髪に様変わりしていた。

いや、すごく合っているんだけどね…。

それから吹っ飛ばされた男と白銀の彼との会話が始まった。

吹っ飛ばされた男が大声で文句を言ってるけど、なんか彼、すごいキレてるっばい。

いきなり男を光の鎖のようなもので拘束し、男の周りに雷をバンバン落としてた。

あまりに非常識な光景に、白銀の彼以外が呆然としてた。

拘束されてた男は泡吹いて気絶してた。ざまーみる。

そして彼は、女の子を引き連れて、颯爽とギルドから出ていった。

1人の女の子を守る為にここまでするなんて……。

「か…かつこよすぎる…！」

たぶんあたしの目はハート型になってたな。

隣の間僚にすごい目で見られたし。

あゝ彼に会いたいなあゝ。

今日も来てくれたら嬉しいんだけど…。

ギイ
…

ん？誰かギルドに来たみたいだな…。

14話 初依頼 (1) (後書き)

長くなりそうなので切りました。

海行ったから疲れて、超眠たい…。

しかし、書き上げる為に、気力振り絞って、眠気撃退してた。

褒めてくれ。

ご意見要望ご感想お待ちしております。

15話 初依頼 (2) (前書き)

最近、更新する時間が遅くなったね。

つか今から書き始めるとか……日付替わるな、絶対。

ちなみに「今」とは22時50分現在のことを言っております。

おはこんばんちわ、作者です。

挨拶はスルーしなさい。

私もやつちやった感が半端ないから。

それから、霧咲聖様、アンケートのご協力感謝します。

現在、2……1票

3……5票

というかんじになっております。

うん、偏り具合がすごいですね。

1と4の人気の無さ……。

なんか不憫になってくるヨ……。

だから皆さん！ 1と4にも票を入れてあげようヨ！

べ、別に投票して欲しいからじゃないんだからねっ！

……………オエッ！

自分で言っつて吐き気した……。

いや、別に投票してもらいたくないわけじゃないよ？

すぐ欲しいよ？票。

ツンデレは思ってることと言ってることが逆という無限の法則（何が無限かは知らん）を適用してください。

そんなgod godな空気ですんじや。

15話 初依頼 (2)

「キツくね!？」

「ギイ…。」

俺とメルトがギルドに着き、入り口の扉を押すと、仰々しい扉がなんと軽薄な音をたてて開いた。

朝早かったせいもあり、人は疎らで、昨日のような活気は、まだない。

そのせいか、扉が開く音は予想外にギルド内に響き、飲み食いしていた人達や、立ち話に興じていた人達が一斉にこっちを向いた。

そして静寂…。

「空気ヤバし。」

一斉に視線を浴びながら、俺はそんなことを考えていた。

静まったせいで、小声の会話が耳に入る。

「……………を倒した奴だ」

「なんでも……………らしいな」

「ああ……………近づかないようにしよう」

小声すぎて所々聞こえなかったがあることはわかった。

「……………初日で嫌われた」

結構心にくるものがある。

おっと、目からポタージュが……………。

「だ、大丈夫ですって！しばらく依頼をこなしていけば、皆さんもリヨウさんの人柄をわかってくれますよ！」

ああ……………頼りないメルトが、今は輝いて見えるよ……………。

「……………今なんか失礼なこと考えました？」

滅相もない。

「そう思うなら声に出して言うてください」

当然、そう（・・・）勘違いされてもおかしくはない。

実際は、昨日登録したばかりの駆け出しDランカーだが。

これを知ったら、冒険者たちは驚愕を通りすぎて、ショック死するかも知れない。

主に自分たちの力量的なところを考えて。

あと、昨日の事件（？）はギルド内では早くも有名になっていた。

最近暴れていたAランカーを伸した謎の銀髪美少年……。

やら

誰もみたことのない魔法を扱う天才高ランカー……。

とか

閃光を纏った白銀の英雄……。

みたいなかんじで。

本人が聞いたら、美少年（やら天才高ランカー）やら英雄（の部分）を否定するだろうが、生憎とそれを教えてくれる存在がいらない。

普通ならチンピラのひとつやふたつ、絡んできそうな気がするが、ここいらで最強のランカーを瞬殺した奴に絡みにいくほど、バカではないらしい。

つまりは情報源皆無。

棕は自分の交友関係の狭さに気づき、嘆いたが、もう遅い。

誰かに話しかけようとしても、皆、目を合わせず、さりげなく距離を取る。

棕の心は、一番の紙ヤスリでやすられるようにゴリゴリと削り取られていった。

今度は目からコンソメスープが流れ出たようだ。

メルトが必死に慰めている。

185はあろうかという高身長（1年すぎし、身長がだいぶ伸びた）に、絞り込まれた肉体を持つ、細マッチョ野郎が、身長150センチ程度の少女（実際の年齢は……追って記述しよう）に慰めてられ

ているのだ。

シユールである。

まあどちらも見目が悪くないので、絵になっではいるが。

そんな感じで打ちひしがれながらもなんとかカウンターへたどり着いた様です。

）．．．．．）．．．．．）．．．．．）．．．．．）．．．．．）

多大なダメージを（精神面に）受けながら、カウンターに無事たどり着いた。

メルト曰く、顔が絶望に染まっているそうだが………アハ、ソーカモネ。

おおっと、そんなことを考えている場合じゃない。

気を取り直して、昨日と同じく、ポニテとメガネが特徴の2人組の今日はメガネさん（仮）に話しかける。

「すみません、依頼を受けたいんですが」

「……ハッ!? は、はい! 依頼でございますね!？」

はい、依頼でございますよ。

なぜに焦るし。

「ええ、どんな依頼がありますかね？」

「そ、その前にギルドカードの掲示をお願い致します！」

おお、そうすか。

「はい」

なるべく笑顔を努めて、手渡す。

ギルドカードは漆黒で、清々しいくらいにDランカーであることを示している。

「ヒイ！？た、確かに承りました！」

「ぐふう！」

い、今のはリアルにダメージ受けた……。

「カ、カガリビ様ですね？」

カ、カガリビ様ですよ。

「い、依頼を受けられる場合はあちらのボードから依頼書を取ってカウンターで受付を行ってください。依頼が受託されたら、依頼達成に現地へ向かってください」

段々、慣れてきたのか、丁寧な落ち着いた対応になってくる。
そんなかんじなのか、依頼の受け方。

知らなかった。

「じ丁寧に、ありがとうございます（ニコッ）」

「い、いえ／＼／ 職務ですので／＼／」

またもった……そんなに恐いだろつか……。

ちょっと鬱になりながらも、ボードのほうへ歩いていく。

ボードには様々な依頼書が貼り付けられていた。

「まあ初めてだし、簡単そうな依頼にするか」

今ある、俺がいけそうな依頼は……

【薬草採取】

推奨ランク：D

備考：街を出て西に少し行った、ベルタ山の麓で薬草（メイレン草）
を採取。麓には魔物がほとんどいない。いても小型のものしかいな
いので、危険性無し。

【ボアイト10体討伐】

推奨ランク：C

備考：ベルタ山の中腹で増えたボアイトの討伐。討伐証明部位は尻尾。ボアイトは細長い体長2キアル程度の、超小型飛竜。攻撃力はほとんどなく、体当たりと短い牙での噛みつきしかしてこない。基本5〜10匹で集団行動している。中には大型種もあり、危険性も上がるが、集団行動することはない。現在、ベルタ山では大型は確認されていない。

【ウエアウルフ5体討伐】

推奨ランク：A〜B

備考：神速で知られる体長5〜6キアルのウエアウルフの討伐。討伐証明部位は牙。北へ3キアルスほど行ったところにあるマリアス湖で最近目撃されるようになった。素早い動きと、集団攻撃でこちらを翻弄してくる。牙と爪を使った攻撃が主体。危険度は高いが、火属性の魔法に弱いので、火魔法で攻撃すれば、難なく倒せる。

とりあえずこんなところかな。

一応説明しとくが、1キアが1センチ、1キアルが1メートル、1キアルスが1キロメートルとなる。

ボアイトはへびに羽が生えた感じのやつで、正直弱そう。

それより気になるのはウェアウルフだ。

意外と強かったのな、コイツ。

まあボコられた俺がいう台詞じゃないけど。

しかしウェアウルフか……。

今一度、リベンジと洒落こみますかね。

俺はウェアウルフ討伐の依頼書を剥ぎ取り、受付へ持っていく。

そして依頼書をさっきのメガネさんに差し出すと、驚きに目を見開いた。

「……本当に行かれるのですか？」

「ええ、一度戦って勝ったことあるんで。大丈夫でしょう」

なんか信じられない！といった目で見られるけど、そんなに弱そうに見えるだろうか……。

「……わかりました。ただし、万が一カガリビ様が亡くなられた場合、ギルドは一切の責任を負いません。それでもよろしいですか？」

そっか。

低ランカーが高ランクの依頼を受ける場合はそうなるんだっけ。

「はい、いいです」

「……ではこちらの書類に本人直筆のサインと母音を押しいただきます」

そう言って、なにやらゴチャゴチャ書いてある紙を渡される。

内容を要約すると、死んでも知らんでえ、と書いてあった。

速攻でサインと母音を押し、メガネさんに渡す。

「……確かに。それでは依頼達成を目指し、頑張ってください」

依頼書にギルドの依頼受託印が押される。

「ど〜も〜」

俺はそう言いながら、メルトを伴って、ギルドを出る。

そついやずつと空気だったな、メルト。

「メルトは依頼とかせんのか？」

「いえ、私は今日はいいです。買い物したいですし」

「そつか。んじゃ行ってくる。絡まれないように気をつけるよ〜」

まああんだだけやりゃ近づいてこらんとと思うが……。

「だっ、大丈夫ですよ！／＼／ 人の心配してないで、自分の心配してください！／＼／」

おゝ恐々。

「はいはい。んじゃな〜」

軽く手を振りながら、北門を目指し、歩きだす。

棕は今一度、ウェアウルフに相對するため、足を進める。

その足取りに、少しの迷いも見られなかった。

15話 初依頼 (2) (後書き)

またも長くなりそうなんでカット。

結局、丁度三時間で書き上げました。

予想より少し早かったかな？

ご意見要望ご感想お待ちしております。

16話 初依頼 (3) (前書き)

やあ、作者だよ。

さつき魔法先生ネギま！を全巻一気に買いました。

学校帰りだったんで肩終わりました。

そして財布の中身も終わりました。

いや〜しかしそれを差し置いて面白いですね。

今まで二次小説は読んでたんですが、原作を見るのは何気に初めてです。

たぶん読み終わるのに2日か3日かかりますよ。

今度のネギまとハヤテのごとくの映画見に行くんで、さつきと読まなければなりません。

あと話変わりますが、主人公が持っている刀の名前募集です。

いつまでも「鎖付きの刀」なんて呼び方はかわいそうなんで。

でも自分で思い浮かばないというね。

なので考えてくれたら嬉しいなあ〜なんて。

一応特徴をあげておきます。

紅い鞘

鐔の所に鎖付き

朱い刀身

長さは1メートルくらい

凝った装飾はない

こんなところでしょうか。

刀の名前募集も8月いっぱいになります。

アンケートとともに、ご協力ください。

それではどうぞ。

16話 初依頼 (3)

「はあ!？」

北門を出て、15分ほどでマリアス湖に着いた。

マリアス湖は穏やかな澄みきった色をしており、太陽の光が水面に反射し、すごく綺麗だ。

いつまでも見ていたい気になるが、生憎そんな暇はない。

ウェアウルフが彷徨っているらしいからだ。

湖自体はそこまで大きくないので、反対側の湖岸も良く見える。

今、湖周辺にウェアウルフは確認されない。

たぶん反対側の岸にある木々の生い茂った森林のなかに姿を眩ましているのだろう。

今俺が立っている湖岸から湖の半分ほどの岸に木がないが、もう半分ほどの向こう側は木々がそれはもう見事に、例えて言うならば親父の鬱陶しい脛毛のようにモサモサに生えている。

あゝあんなか入ってウルフちゃんを探さないといけないのか……。

た、俺の勇氣と尿を歸せ！」

と生まれたての小鹿のように足をガクガクとさせながら、漏らしつつ言っな。

あれ？いつから話逸れた？

閑話休題

とにかく今はウェアウルフの居場所を特定することが先決だ。

獣道には、ウェアウルフと思わしき、犬の五倍くらいデカイ足跡がある。

肉球のあとが素晴らしくキュートだ。

出来ることなら触りたi（ry

……たぶんこれを辿れば行けるんでね？と思考を切り替えつつ、不気味な森に勇氣を出して入っていく。

もしここで美白パックを装備したお袋に出会ったら、間違いなく横四方固めに持ち込んでしまうな……。

運がいいけどさ……。

「（めっさ恐いんですけどおおおおお！？）」

こんな暗やみから虎視眈々と狙われたら……。

うっひゃあ〜冷や汗が止まらねえぜ……。

狙われていることに対する恐怖ではない。

強いて言うなら、5人組でお化け屋敷に入り、最初は皆と一緒だから恐くなかったが、気づいたら置いてかれたときみたいな恐怖だ。

うっほ、興奮してきた！ 恐怖でテンションがおかしくなっています。

よし、お前達ウエマウルフがその気なら、こっちも殺ってやるうじゃねえか！

そう考えながら、腰に携えた鎖付きの刀に魔力を流し込み、髪が銀色に変化し、鎖が腕に巻き付きながら、ゆっくり刀を抜く。

刀を抜ききり、構える。

そして、雷魔法を使い、刀身に帯電させる。

準備は整った。

俺は大声で叫ぶ。

「おお〜い！こっちは準備出来たぜえ〜！かかってこいや〜！」

いや〜……いや〜……いや〜……。

エコー樂しす。

反応は……あり。

こちらの威嚇行動だと思ったのか、かなりのスピードで近づいてくる。

近づくにつれ、ウェアウルフの低い唸りが聞こえる。

……少し開けた場所へ行こう。

こんな障害物の多いところでは襲ってこないだろうし。

そう思い、少し移動。

俺が刀を振り回しながら、立ち回り出来るくらいの広さのところに
出る。

気配は5。

漏れ無く全員（匹？）来たようだ。

欲望丸出しだね！

）．）．）．）．）．）．）．）．）．）

まず、一番手前のウェアウルフに飛びかかる。

殺気で動けなくなっているようだ。

首の右側に斬りかかる！

ザシユ！

バチバチと雷電しながら、あっさり斬れてしまった。

ウェアウルフは血を噴き出し、焦げ臭い匂いをあげながら倒れる。

やはりこの肉を斬る感覚は嫌だな……。

手に残った感触を確かめながら、残りのウェアウルフを睨みつける。

仲間が殺られたことで、やっと硬直が解けたようだ。

低い唸りをあげながら、睨み返してくる。

そして2体のウェアウルフが飛びかかってくる！

俺は後ろに下がりながら、右手を突き出し、火の中級魔法を放つ。

右手のひらの前に精製されたハンドボール大の火球2個がそれぞれウェアウルフに飛んでいく。

まず左のやつは反応出来ずに火球が中り、炎上。

そして右のやつは左のやつが燃えるのを見て、寸での所で火球を回避。

驚きに立ち止まり、燃えているウェアウルフを見ている。

先程火球が中ったやつは、倒れ伏してパチパチと燃えている。

肉の焼ける匂いが辺りを漂う。

……臭い。嫌な匂いだ……………。

俺は肉の焼ける匂いに顔をしかめる。

ウェアウルフ達は仲間が再び殺されたことに怒り、今度は3体が俺を囲み始めた。

「いいね……………かかってこいよ……………」

その言葉と同時に、ウェアウルフ達が時間差で襲いかかってくる！
時間がかかるのも面倒だ、と思い、俺は冷静に光化し、光速で敵を1体、2体と切り捨てていく。

2秒もいらなかった。

端から見たら、突然ウェアウルフから血が噴き出し、倒れたように見えるだろう。

勝負は結した。

俺は死んでいるウェアウルフ達を無表情で見つめながら討伐証明部位である牙を取っていく。

そして一言。

「ありがとう」

これは、俺の生きる糧になってくれるウェアウルフへのお礼だった。

ここで謝る奴は三流だ。

俺は討伐照明部位を持ってきた袋に入れ、無言で街に向かう。

俺が去ったあと、あそこにはウェアウルフの死体がないはずだ。

初めてウェアウルフを倒したときのように、分子レベルに分解した。

せめて、死体は他の動物に食い荒らされないように。

〕・〕・〕・〕・〕・〕・〕・〕・〕・〕・〕・〕・〕・〕・〕・〕

俺は街に着き、一直線にギルドを目指した。

ギルドの前に着く。

そしてギルドの扉を開け放つ。

また、ギルド内は静寂に包まれた。

多数の視線が俺に突き刺さる。

まだ嫌われてんのか……。

若干鬱になりながらも、カウンターを目指す。

そしてまたメガネさんに話しかける。

「ウェアウルフ5体討伐、終了しました。これが討伐照明部位です。確認してください」

一気にまくし立てながら、ウェアウルフの牙を差し出す。

なにやらメガネさんはポカーンとしている。

「え〜っと……つい1時間に依頼されたやつですよね？」

「そうですが？」

まだ1時間しか経ってなかったのか……。

早すぎたか？

「す、すごくお早いですね……。今確認しますので、少々お待ち

ください」

そう言っつて奥に引っ込む。

その場に立っつてメガネさんを待つ。

……なにやらすごく熱い視線を感じる。

なんか……恋する乙女の視線を……。

……誰だ？ いったい誰なんだ？

そんなことを考えながら待っつていたら、メガネさんがやっつてきた。

「お待たせしました。確かにウェアウルフの牙が5体分ありました。こちらが今回の依頼報酬です」

金貨を何枚か渡される。

すごいな、金貨初めてみた。

今までは銀貨で十分生活出来たしな。

儲かった。

「ありがとうございます。では」

そう言っつて、踵を返し、出口を目指そうとする。

「あ、あの！ 明日の朝、ギルドに来ていただけますか？ ギルド長が

話があるそうです」

出口へと進めていた足を止め、振り返る。

「……今からじゃダメなんでしょうか」

面倒なことはさっさと終わらせたい。

「いえ、今ギルド長は忙しくて……。カガリビ様も疲れてらっしゃると思うので、明日、ご足労願います」

まあ忙しいなら仕方ないか……。

疲れてはないんだけどね。

「わかりました。それでは」

今度こそ、出口に向かって歩き出す。

早々に宿に帰った俺は、腹が減ったので食堂へ向かった。

明日、なに話されるんだろ？

そんなことを言いつつ、頭の中では何を食べるか模索していた……。

16話 初依頼 (3) (後書き)

はあつかれた。

昨日の夜は寝落ちしたんで投稿出来なかった。

刀の名前の件、よろしくお願いします。

17話 ギルドの長(おさ)(前書き)

はいどうも、作者です。

昨日投稿しようとしたら、間違えて書いてたやつ、消してしまって超鬱になってました。

それから頑張ってる思い出して書いてたら寝落ちしました。

眠気ヤバし。

ザル様、渡りガラス様、池宮樹様、霧咲聖様、YU様、刀の名前を
考えてくださり、ありがとうございます。

いい名前ばかりで、どれにするか迷います。

加えてYU様、アンケートのご協力、感謝します。

どちらもまだ募集中なので、ご協力お願いします。

最近世界史で、「クリミア戦争」が「釘宮戦争」に聞こえていけない。

それでは、どうぞ。

17話 ギルドの長（おれ）

「マジですか!？」

早朝。

俺は、さっさと話とやらを終わらせる為に、ギルドに向かっている。通りは、朝のため、そこまで賑わいを見せていない。

しかしそんなことはどうでもいい。飯をまだ食ってない。腹減った。

お、なんか美味^{うまい}そうなもん発見。

「おばちゃん、これ一個」

あいよ、との元気な声。朝っぱらから良くそんな声が出せるもんだ。

商品を受け取り、再び足を進める。

買ったのは、肉汁が滴り落ちそうな何かの肉がパンに挟まれている、ホットドッグっぽいもの。

出来立てで少し湯気が出ている。早速一口。

「おほ、美味っ!」

やべえコレ病^やみつきになる。

どンドン食べる。

一瞬で胃の中に消えた。

食いながら進んでいたの、あっという間にギルドに着いた。

扉を開ける。

早朝のせい、ギルドには冒険者らしき人がいない。いるのは、なにやらカウンターの裏でゴソゴソしているメガネさんらしき人だけだ。ポニテさんも不在。

近づく。やはりメガネさんだった。早速話しかける。

「お早うございます。昨日のギルド長の話の件ですが……」

突然話しかけられて、驚いたのか、一瞬硬直したあと、俺のほうを見て、ホッと安堵し、姿勢を正す。今の反応を見る限り、あまり嫌われてないのかもな。

「お早うございます。朝早くからすみません。早速ギルド長の所へ案内します、着いて来て下さい」

そう言って、メガネさんはカウンターの裏にある階段を上がる。俺もカウンターのの中に入り、階段を上がる。

階段を上がると、一本の廊下がまっすぐ続いており、両脇に二つずつ扉があり、廊下の突き当たりには、なにやら重厚な扉がある。

メガネさんは突き当たりへ一直線に進んでいく。あそこがギルド長の部屋なのだろう。

不思議と緊張してしまう。どんな人なんだろうか……と。

この、常日頃賑わっているギルドを纏める人だ。威厳のある、ゴツいおっさんとかじゃないだろうか。

ゴクッ！

唾を飲む。

「こちらがギルド長の部屋になります」

突き当たりまできて、メガネさんがそう言う。

ギイイイ……。

そしてメガネさんがゆっくりと扉を開ける。

さあご対面……。

「いやっふううう（ボタン！）……」

メガネさんが顔に冷や汗を浮かべながら、凄まじい速さで扉を閉める。

なのかわからない本が所狭ところひさましと並んでいる。手前には来客用と思わしきソファ（高そう。なんか赤い液体付いてるけど）と机（これも高そう。同じく赤い液体が……）。そして奥には、ギルド長の仕事机であろう、豪華な机が。筆やら書類（赤い液体付き）やらが散らばっているのは、ギルド長がだらしないせいだと思いたい。

そして仕事机の上でゲン　ウポーズを決め込んでる髭が1人。威厳を保とうとしても、もう無意味だ。あと額ひたいから赤い液た……ああもう血でいいわ！血が流れているのは気のせいだろう。

話をきりだす。

「お早うございます。俺がりヨウ・カガリビです。お話というのは一体……？そして……さっきのは何だったのでしょうか？」

「……とりあえず、そこにかけてくれたまえ」

来客用ソファへへと促されたので、とりあえず座る。いい加減、無駄な威厳はやめてほしい。つか質問無視されたし。

「ラルフくん、なにか飲み物を」

「畏かしこまりました」

ギルド長がメガネさん……ラルフさんにそう言う。何気に名前初めて出たよな……。

「やて……」

ギルド長が話を始める。

「まずは自己紹介しようか。私の名前はラグネス・ナザーレン。このギルド長をしている。趣味はダンスだ」

さっきのはダンス……だったのか？

ラルフさんが珈琲みたいなものをラグネスさんと俺の前に置く。

「ごっ、ご丁寧にどうも。それで、話というのは？」

苦笑しつつ、失礼のないように返す。さっさと終わらせて帰りたい。また腹が減ってきたし。

出された珈琲みたいなものを飲みながら、そう考える。

「今から話すよ。一先ず、突然呼び出してすまないね。何分、なにぶん驚きの報告を受けたものだからね」

驚きの報告？なんじゃそら？

「はあ……？その報告というのは？」

「『冒険者になったばかりのDランカーが、初依頼でAランクの依頼を受けた』というものだよ。それだけならば、今までに何度かあったから、別段呼ぶ気はなかったけどね。しかし『その依頼を一時間で達成』……これはさすがに呼ばざるをえなくてね。今まで、駆け出して高ランクの依頼を受けた者は、大概自意識過剰のバカだったから、尻尾を巻いて逃げ帰ってきたんだ。だが、君は証明部位を持って、帰ってきた。ありえない早さで。それもウェアウルフの……ね。熟練の冒険者でもこうも早くは達成できないよ。あ、別に

倒したことを疑っているわけじゃないよ？ただ、どう倒したのか、気になってね。一体、なにをしたんだい？場合によっちゃ、ランクを上げないといけない。強さが、Dランクの枠に収まらないならね」「うくん……。本当に疑ってはないううだな……。つかランク上がるの？なんかめんどいことになりそうだけど……。」

「わかりました。話しましょう」

そう言って、ウェアウルフとの戦いの様子を、詳しく話した。

「……………」

「そうか。そういうことね……」

「……………」

なんか考えてらっしゃる。

「……………その、ウェアウルフの死体を消した技を見せてくれないか？」

「え？あ、はい」

この部屋でいらんもんはあるのか？あ、そうだ。

「んじゃ、色んなところに付着した血を消しましょうか」

「おお、それは助かるねえ」

なんかニッコニッコしてる。そんなに嬉しいのか？

「いきます」

物質変化を発動。俺の髪が銀色に変わっていく。ラグネスさんとラルフさんは目を見開いてる。

「（血を分解つと）」

付着していた血が、紅い粒子を撒き散らしながら、消えていく。幻想的な光景だった。血だけ。

粗方処理し終わったら、能力解除。銀髪が黒髪に戻る。

「……………つと、こんな感じですね」

まだお二人さん混乱中。

「……………おい」

呼び掛けてみる。

「ハッ！？あ、ああすまないね。ちょっと吃驚したんだ」

ギルド長復活。

「ハッ！？ま、まさか貴方が『閃光の白銀』だったとは……………」

ラルフさんふっか……………

「いや、ちよつと待てええええ！なんだそれは！？」

「何って……貴方の二つ名だと思えますが？」

いや……いやいやいや！

「なんでそんなもんが！？」

いつ付いた！？

「なんでと言われましても……。少し前に、女の子に絡んでいたAランカーを、銀髪の男が瞬く間に倒したことで、この名前が広がったんですよ。こちら辺で銀髪の人はいないので、誰かわからなかったんですが……」

「……………(ダラダラダラダラ)」

冷や汗が大量に流れる。超身に覚えがあるんですが……。

「私も最初は誰かわからなかったんですけど……さつき髪の色が変わったことで確信を持ちました」

持たないでええええええ！

「貴方が……『閃光の白銀』様ですね？」

目立つつもりなんてなかったんだけど……。

「ハア……………たぶん……………てゆーか間違いなく俺ですね」

「「そうなのか(ですか)！」」

うお！？吃驚した！2人ともそんなに食いつくとは……。

「うん……やっぱり……だからな……よし！」

ラグネスさん、なにやらブツブツおっしゃってますけど、なにがよし！なんでしょうか。

「この方が……聞……チャン……よし！」

ラルフさん、身体をクネクネさせながら、なにを考えてよし！と言ったのでしょうか。

「カガリビ君……いや、リヨウ君と呼ばせてくれ。君とは今後とも長い付き合いになりそうだ。あと敬語を使わず話してくれないか？君と仲良くしたいからね」

と、突然なんだ！？まあ敬語じゃなくていいってんなら普通に話させてもらっぜ。

「お、おうわかったよ、ラグネスさん。それより長い付き合いってのは……」

「あ、あの！カガリビさん！」

「な、なんですか？」

苦笑いしつつ、訪ねる。

「わ、私とお友達から始めてください！」

ええ、いきなり何事？まあ友達ならいくらでもなるけどさ。

「あ、はい……いや、うんわかったよ」

笑顔でそう返す。

「はう／＼ああああありがとうございます！／＼／＼わっ、私は仕事がありますので、これで！」

そう言つて、目にも止まらぬ早さで部屋から出ていった。

な、なんだつたんだ？

「凄く速いね……。それよりも、君に渡したいものがあるから、いいかい？」

「え、おう」

渡したいもの……？なんだろう……。

ラグネスさんがなにやら机をこそこそと漁っている。そしてペラい紙を取り出して、なにかを書いている。

「よし、リヨウ君、ギルドカードを貸してくれないか？」

「あ、ああ」

言われるままに、ギルドカードを渡す。

ラグネスさんは、先ほど何かを書いていた紙にギルドカードを乗せて、何かを呟く。

すると、紙が光り出し、光が治まると、そこには赤い色をしたギルドカードが乗っていた。

「はい終了。どうぞ」

そう言つて、赤いギルドカードを渡される。

「……………なんぞ？」

意味わからん。

「今、君のギルドカードをランクアップさせたよ。これで晴れてAランカーの仲間入りだね。おめでとう」

……………はあ！？

「いや、なんで!?!」

「なんでつて……………Aランカーを押さえ込む技量に、Aランクの依頼達成の早さ、固有技能の強さなんかを見れば、妥当だと思っただけだね……………。ホントはSの称号くらいを上げたいんだけど、いきなりやると周りが煩いから」

「いやいやいやいや!マジかよ!?!」

「こんな簡単にランクアップして、いいもんなのか……………?」

「まあ普通はこんなに早くないね。でも、君の技術は明らかにDの
枠……いや、Aの枠すら超えている。ランクアップさせざるをえな
かったんだよ」

そういうことか……。

「はあ……そんなもんなのか？」

「だって君、その気になれば、相手を一瞬で消せるでしょ？」

うっ、痛いところを……。

「まあ君と話してみても、人格に問題はないと判断したからね。こう
させてもらった。悪いね、急にこんなけとしちゃって」

「いや、別にいいけどさ……なんか呆気ないな」

事実、登録して3日も経ってないからなあ……。実感が湧かん。

「とりあえず、君とは長い付き合いになるんだから、話でもしよう
じゃないか。報告でしか、リヨウ君のことは聞いてないのでね。直
接対話するのもいいだろう」

「はあ……色々あって疲れた。まあ話くらいならいいけどさ」

こうして、ラグネスさんと話をしていた。職員なんかには色々紹介されて、ダルかったのはお兄さんとの秘密だぜ？

こうして、平和な時間は過ぎていく……………

17話 ギルドの長（おさ）（後書き）

やっと書き終わった……（；、）

今回は長かったんでね？

最期の方の無理矢理感が酷いね……。まあ気にしない。

引き続き、アンケートと刀の名前の件、よろしくお願いします。

ご意見要望ご感想お待ちしております。

18話 ランクと実力 (1) (前書き)

サボってた分頑張って書こうと思った今日この頃。

はっきり言ってこの小説はどこが面白いのか……自分でもわかりません。

一体どこが面白いんでしょうか？

つかまずこの小説はどこに向かってんの？ (´・`・´)

方向性がある……ネタがある……。

と、いい感じに悩んでる作者です。

mikibo様、みかんとか様、刀の名前を考えてくださり、ありがとうございます。

加えてみかんとか様、アンケートのご協力、感謝します。

そろそろ二つとも、選定し始めようと思います。

でもまだどちらも募集中ですので、ご協力をお願いします。

それでは、どうぞ。

18話 ランクと実力 (1)

「なんだこいつ!？」

はろ〜…………… 掠だヨ〜……………。

Aランクとか…………… 面倒くさいことになったもんだ。

さっきまで…………… 昼頃までラグネスさんと話していた。俺の知らないことを色々と教えてくれたからありがたいけど、その分面倒くさいことが増えるのが判明した。

主にやつかみとか、やつかみとか、やつかみとか……………。

なんか「君の力量はSランクどころか、SSに近いから、気をつけてね」だと……………。やつかみもあるけど、下手すりゃ一瞬で人が死ぬから、力の加減とかを考えないといけならしいし。完璧に制御出来てるんだけどね。

しかも、貴族や王族に目を付けられると厄介なことになるから、あまり派手な行動は控^{ひか}えろとも言われた。

別に派手な行動をしたつもりはないんだけど…………… (自覚無し)。

ん?なんか言ったか?

とにかくにも、これからどうするかを考えなきゃならん。

そう考えながら階段を一番下まで降りきる。

。幸い、昼時だからか、喧騒に紛れ、俺の登場で静寂せいじやくが訪れることはない。いいことなんだが、改めて自分が嫌われている（と思ってる）ことを再認識してしまう。交遊関係狭し……。

そう思い、嘆なげいていると……。

「リヨウさん」

約一名、話しかけてくれる人がいる。少し前に友達になったラルフさん……友達なんだからラルフでいいか。ラルフである。

「ん？どうした？」

「いえ、依頼は受けないのかな、と」

あ、すっかり忘れてたな、依頼の存在。話が結構衝撃的で記憶の彼方に飛んでいた。

しかし、受けようにもメルトに何も言っていない。まだのほうがいいだろう。依頼のこのついでに、ランクアップしたことも話すか。

「いや、また後に受けるよ。連れに何も言っていないんでね」

「そうですか。では、またあとで来てくださいね」

笑顔でそう言ってくる。美人だから笑顔が似合うなあ……。ギルド

内の冒険者の数人も、彼女に見惚みほれている。かくいう俺も、少し見惚みほれてしまった。

「わかった。じゃあな、ラルフ」

振り向き、出口に向かって歩きながら、後ろ手に手を振る。少し赤くなつた顔を見られたくなかつたためだ。

しかし、ラルフはそんなこと気にしちやいなかった。

「（名前で呼ばれた）／／／／／」

惚ほっけていた。

）．．．）．．．）．．．）．．．）．．．）．．．）．．．）

さっさとギルドを出た俺は、宿屋を目指して歩いてきた。昼飯を食つてないせいで、通りの店から香る、香ばしい匂いに釣なられそうになるが、耐える。宿屋の飯のが安いし美味いからだ。

「つと、着いたか」

宿屋に入る。受付に、初めて来たときと同じ様に、後ろ髪を束ねた女性……カインさんがいた。カインさんの他には、泊とまっていると思われる客が数名いるだけだ。メルトの姿はない。

「おや？どこ行ってたんだい？随分と朝早くから出掛けてたみたいだけど」

メルトの姿を探していたら、カインさんに話しかけられた。

「ええ、ちょっとギルドに呼ばれまして」

「へえ〜？なんかやらかしたのかい？」

興味津々といった感じに聞いてくる。

「いや、まあやらかしたと言えばやらかしたんですけど……別に悪い話ではなかったです。いや、悪い話か……？」

寧ろ、いい話だったんだろうけど……その分、面倒くさいことになったからな。

「へえ、なんの話だったんだい？」

おい、顔にデカデカと『めっさ気になる超面白そう』『云々(うんぬん)』と書いてあるぞ！……まあ別に話してもいいんだけど。

そう考えていたら、階段からメルトが降りてきた。

「あれ？リヨウさん、帰ってたんですか？」

「おう。ちょうどいい、メルトも聞いてくれ」

俺は2人に、ギルドでの出来事を語った。

く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く

「へえ〜そんなことが……」

2人の声が重なる。Aランクになるって『そんなこと』なのか？

「凄いじゃないですか、いきなりAランカーになるなんて！私なんてまだCランクなのに！」

「そうだねえ。あんた、見た目ひ弱な感じするけど、人は見かけによらないとはこのことだね」

あ、やっぱり凄いんだ。そしてカインさん、サラダと酷いこと言うな……。

「うん、まあありがとう……？それで、昼飯食ってから依頼受けに行くんだけど、メルトも一緒に行くか？」

「え？いいんですか？」

「おう、全然問題ない」

メルトの戦い方とか見てみたいしな。案外コンボとか出来そうだったら、戦術の幅広がるし。

「じゃあ行きますー！」

元気いいなあ〜。

〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜

その後、昼飯を食い終わった俺たちは、ギルドへ向かった。ギルド

に入ると、まだ賑わいを見せていた。盛況せいぎょうだなあ……と思いながら、カウンターへ向かう。

「ようラルフ。依頼、受けに来たぞ」

陽気に声をかける。ラルフは、ギルドに入ってきた時にこちらに気づいていたようで、笑顔を向けてくる。

「お待ちしてました。そちらがお連れ様ですか？」

仕事だからか（午前中もだが）、丁寧な対応をされる。やはり真面目そうな見た目通り、真面目なようだ。

「おう、メ「メルトです」……まあよろしくやってくれ」

言葉を重ねられるって、存外心にクるものなのね。

「メルト、こちらはラ「ラルフです。よろしくね？」……ぐふっ！」

いいパンチだ……負けたぜ……。パンチを受けた訳じゃないけど。

「……とりあえず、今いいかんじの依頼あるか？」

「掲示板に依頼が張られているので、選んできたらどうですか？リョウさんのランクに見合ったやつがあるはずですよ」

そついやそつだった。

「よしメルト、見に行くぞ」

「あ、はい！」

メルトの返事を聞き、掲示板に向かう。

〵・〵・〵・〵・〵・〵・〵・〵・〵・〵・〵

最初は高ランクの依頼を受けようと思っていたけど、あまり高いランクの依頼だと、メルトが大変なので、急遽メルトに見合った依頼を受けることに。

色々と探していたら、昨日見つけたボアイト10体討伐が残っていた。ちょうどいいので、これを受けることにした。

「ラルフ、これ頼む」

掲示板から剥ぎ取った依頼書をラルフに渡す。

「え？Cランクの依頼ですか？リョウさんならもつと高ランクの……」

「いや、今日はメルトと一緒にだからな。高ランクを受けてメルトを守りながら戦えるかどうかわからないし。怪我させたら嫌だしな。てゆーか、そもそもメルトがどのくらい強いかわからないから、今日はこれで行く」

なんかメルトに失礼な言い方だけど本当のことだ。まだ俺はメルトを守りながら立ち回ることが出来るか、よくわからない。だからこそ、今回の依頼で見極める。

「わかりました。それでは、依頼を受諾じゅたくいたします。ギルドカード

の揭示をお願い致します」

俺とメルトはギル力を差し出す。俺は赤、メルトは白のギル力だ。周りの冒険者は、俺のギル力を見て驚いている。

「……はい。ありがとうございます。それでは、無事、依頼を達成されることを祈っております」

そう言つて、ギル力を俺たちに渡し、腰を折つて俺たちを見送つてくれる。あんな綺麗なお辞儀、初めてみた。

「んじゃ行つてきまゝす」

俺は軽いノリで。

「ありがとうございます！行つてきます！」

メルトは元気よく返事をし、出口へ向かう。

初めてメルトと依頼に出る。メルトの実力はどのぐらいだろうか…。

この時、俺は見誤っていた。メルトの実力を………

18話 ランクと実力 (1) (後書き)

オワタ)

書くのがね？

長くなりそうなんで切りました。

次回、メルトの実力説明です。

ご意見要望ご感想お待ちしております。

19話 ランクと実力 (2) (前書き)

さあ投稿だ！

久し振りだなあ！

ネタがまるつきり思い浮かばなかったので、書き溜めることが出来なかった。

よって！

今(22:50現在)から書き始め、明日は目標3話投稿だ！

何故にここまでテンションが高いのか、作者にも謎です。

さて、臆病者様、刀の名前を考えるのにご協力してくださり、感謝です。

アンケートと刀の名前の発表は後書きでいたします。

本当は作中で名前出してしまおうかと思ったけど、今回の話はメルト無双なので出番がないことが判明し、敢えなく断念しました。

まあそんなことはどうでもいいとして…… オイ

今まで楽しみに待っていて下さった方と、アンケ、刀の名前に協力してくださった方に、今一度謝罪と感謝の言葉を。

すいませんでした。そしてありがとうございます。

それでは、どうぞ。

19話 ランクと実力 (2)

「わはー……イメージが……」

サブタイのサブタイは気にしたら負けだぜ？

……なんだろうか。突然そんなことを言わなければならない気が……。まあどうでもいいか。

その後、ギルドを颯爽と出ていった俺たちは、西の方面にあるベルタ山に向けて歩を進めた。

敵はボアイトという超小型飛竜。見た目は蛇……この世界で蛇に当たるものは『バイド』と呼ばれているらしいが。それに羽が生えた感じだ。魔物図鑑的なもので見たから間違いない……はず。攻撃力は皆無らしいが、そこは魔物。油断していたら、怪我くらい普通にするだろう。鎧とか着てるなら別だけど。いやしかし、魔力で全身覆ったときゃ傷付かん気が……。

まあ今回はメルトも一緒だから、緊張感を持って挑まなくちゃな。

そう考え、今から気を引き締める。

「どうしたんですか？そんなに気張って……。リョウウさんなら、瞬殺出来る程度の魔物でしょう？」

君がいるからさgirlよ。

「いやさ、今回の依頼はメルトに全て任せてみようと思つてさ。実力みたいし。でもメルトも女の子な訳だから……。顔とかに傷でも出来たら大変なわけで……。そんなことが起こらないよう、大変なことが起きる前に助けに入れるよう、気を引き締めてる訳ですよ、はい」

なんで最後、敬語になったんだろ。自分でもわからな「え？私、もう女の子とかいう年齢じゃないですけど？30歳越えてますし」

「え？」

「え？」

「……………」

なにそれ怖い。

つかなんで君はさも当然知っていたらうとといった顔で見えてくるの？なに？俺がおかしいんですか？

「えっと……なんだって？ちよつとおじさんの耳ぶつ壊れたらしいから、もっかい言つてくれない？」

「リヨウさんはまだおじさんなんて年齢ではないでしょう？種族が獣人や竜人なら別ですけど……」

なんか視線が痛い。具体的に言うと、主に頭が可哀想な奴に向ける様な視線が……。

「や……やめろ！そんな目で俺を見るな！頭がアレな奴に向ける目

で！……つてなんだって？なんか今重要なこと言わなかった？獣人や竜人がなんたらって」

「知らなかったんですか？獣人は人間より寿命が二倍近く、竜人に至っては四、五倍近く長いですよ？だから見た目は裏腹うらはらに、大人なんですよ私！」

メルトが発展途上の憤うづましい胸を張りながら、鼻高々と言った感じにそう告げる。

見た目丸つきり俺よりちょい年齢低いくらいの少女。

「こんなんが三十路……アラサー……ありえん……」

「む！みそじとあらさーというものがなんなのかはわかりませんが、バカにされたのはわかりました！」

いや、だつてねえ……。しょうがないじゃん。見た目ただの猫耳美少女なわけだし。

「なにを考えてたかは知りませんが、誉められたことはわかったので許してあげます！」

「恐っ！？なにこの子恐いんですけど！？てゆうか確かに人間からすりゃ大人と言っていい年齢だけど、獣人の皆さんから見りゃ小娘なんじゃね？そうだよね？」

「うっ！……そっ、そんなことないですよ？」

「いや、今『うっ』つつたよね？そしてどもつつたよね？」

「き、気のせいじゃないですか!？」

ギヤーギヤーと言い合いながら、楽しく過ごす午後2時43分(勘)

）：）：）：）：）：）：）：）：）：）

ベルタ山の麓に着き、さあ登ろうと言ったところで、小さな沼を見つけた。なんか周りに美しい草が生えている。針葉しんようの先端から中程なかほどにかけて雪が掛かったように白く、その他の部分が透き通るような青という不思議な草だ。それがそこら中に生えているので、端から見ると雪が積もっているみたいだ。

「あ、これメイレン草ですよ。こんなにあるなら採集依頼も受けたほうが良かったですね」

「へ〜これがメイレン草か……」

初めてみたが、綺麗だな。

感想を心の中で言いつつ、山へ入る。整備されていないので登りにくいが、まあなんくるないさー。

「しかしよくメイレン草だとわかったなあ。たまに採ったりすんの?」

「まあランカーですから、この手の依頼は結構……。しかもメイレン草は見た目が派手なので、わかりやすいですし」

そゆことか。しかし採集依頼はよくするらしいけど、討伐や捕獲の依頼とかは受けないのか？

「……………つなあ」

「……………っはい？」

傾斜がキツくなり、互いに少し息を乱しながら、話しかける。

「討伐依頼とかあんまり受けないのか？」

「っ！……………はい、そうですね」

一瞬つまつたのはなんだったんだ？ま、深く追求するのは止めるか。

「しっかしキツいなあ……………。こんなに急斜面だと嫌になっちゃうな？」

そう話題を変え、話を振る……………

「……………」

……………がスルーされる。

べ、別に悲しくなんかないもん！

……………男がやつても吐き気を誘うだけですな、すいません。

そんなことを考えて一人で悶絶もんぜつしていると……………

「あの……」

と話しかけられる。なにやら決意に満ちた目でこっちを見てくる。

やめてくれ！さっきまでキモいこと考えて一人悶絶してたおじさんをそんなバトル漫画の主人公みたいな目で見ないで！

いい具合にまた悶絶していると、キシヤアアア、とどこぞのエリアンでプレデターな映画に出てくる、エリアンの声みたいなのが複数聞こえてきた。

近くにボアイトがいるのだろう。俺は瞬時に意識を切り替える。

「すまん、話は後だ。今は依頼に集中するぞ」

「!?!はい!」

メルトも意識を切り替えたようだ。

そっぴや今回はメルトの実力を^{はか}図るんだった。俺が依頼に集中しても意味ないな。

「今回はメルト、お前の力量を見せてもらおう。危険になったなら助けに入るから、思う存分やってくれ」

「っ……わかりました」

なんかまたつまつたな。なにかあるのか？

「体調が悪いなら言えよ？無理させるわけにもいかないし……」

「いえ、そういうわけではないんですが……とりあえずいつてきま
す」

そう言って走り去ってしまった。戦つてるところを見なきゃいけないので、俺もすぐに後を追う。

それにしてもメルト、足早いな……。魔力強化などはしてないみたいだから……。獣人の力か？

そんなことを考えていたら、メルトの姿を見失った。早すぎるぜ、あいつ……。

とりあえず、ボアイトたちの声が聞こえる方向に向かう。

もう戦ってるのかな？

そう思い、スピードを早める。

そして数分後、ボアイトの音が聞こえるところに着いた。

そこで目にしたのは………

漆黒の毛並みを携えながら、ボアイトの骸むくうの上に悠然と佇む

ネコだった。

19話 ランクと実力 (2) (後書き)

ふひいゝ終わったゝ

さて、アンケートと刀の結果発表をしましょうか。

まずはアンケート！

結果はこのようになりましたゝ)・、(ノ

1 0票

2 1票

3 6票

4 1票

です！

まあ断トツで3が勝ちましたね。そんなにイチャラブが見たかった
のでしょうか。正直、上手に書ける自信がありません。

しかあし！読者の期待に答えるのが作者の役目！

なんとかしてでも書き上げますよ！

此度アンケートに協力してくださった、渡りガラス様、ユー様、理
系学生様、池宮樹様、miyabi様、霧咲聖様、YU様、みか

んとか様、ご協力してくださり、本当にありがとうございます！

そしていよいよ問題の名前でございますが……。

はっぴよ〜しますっ！

ドウルルルル…… ドラムロールだと思いたい。

ダンッ！

m i k i b o 様からのご応募

『朱嬰』

に決定いたしました〜！

いっぱいいい名前があつて凄く悩みましたが、特に気に入ったのがこの『朱嬰』だったので、これにいたしました。

ほんとに！ほんと〜に！沢山いい名前を考えてくださり、とても嬉しかったんですが、そのぶん選考が大変でした> (´・`・´) <

3日前くらいからどれがいいかなあ…と悩み抜いた末の決断でございます。

此度ご協力くださったザル様、池宮樹様、霧咲聖様、YU様、mi kibō様、みかんとか様、臆病者様、ご協力してくださり、本当に嬉し泣きしそうになりました。こんなにも沢山の人から沢山の名前を覚えてもらえるなんて思ってもみなかったので……。

ともあれ無事にアンケートと刀の名前も結果が出たので、これからは投稿に気合いをいれてこうと思います。

また今日の昼頃に投稿……したいなあと思ってます。

それで、この『ランクと実力』ですが……またもや予想外に長くなりそうなので切りました。

ご了承ください。

20話 ランクと実力 (3) (前書き)

随分遅くなりましたね……。

本当は昼頃に更新しようと思っていたのに、何をトチ狂ったのか、お出かけをしてしまっただすね……。

出かけた先で書こうと思ったんですが、色々あって書けませんでした。

楽しみにしていただきました方々、本当に申し訳ございません。

それでは、どうぞ。

20話 ランクと実力 (3)

とんでもねえな……

……はい？

おっと、三点リーダを使いすぎたな。

……なんだ今の電波は？

うん、気にしちゃいけない気がする。つか気にする暇がない。それよりも気になる物が目の前にあるし。

今、俺の目の前にいるのはネコ。どこからどう見てもまじごと事なき黒猫である。

……アレ？メルトどこ行った？と思うかも知れないが……

「……リョウさん？」

目の前のネコがそうです、はい。

あ、ありえん……！

これは……これは……！

「ぶくく……面白すぎるぜ、メルト……ブハッ！」

「はぁ……やっぱり笑われた……」

クククク……だつて……なぁ？

ちっさい黒猫がメルトの声で呟きながら、悲壮感を漂わせて俯いてんだぜ？気のせいか、顔に漫画チックな縦線が……。

嫌でも笑つちまうぜ……。

「いやあすまん、すまん」

「悪いと思うのなら最初から笑わないでください！」「拗ねたようだ。」

「拗ねてません！」

「だからなんで君は心が読めるの！？」

「声に出てました！」

「MAZIDE？」

閑話休題

それが、メルトを見たらわかるように、ネコになってしまおうという現象だ。正確にはネコに戻る（……）だが。

普段、獣人や竜人と呼ばれる、端的に言うならば亜人は、人型に化ける…… というか九割方人間と同じ構造になる術を使っているらしい。それは意識して使っているのではなく、産まれたときから無意識に展開される術式らしい。

たまに展開出来ない子供も産まれるらしいが。そういう子供には、何よりも早く、人化を覚えさせるらしい。

何故人型に変わるのかと言うと、人型は色々と便利であり、安全だからだ。仮に獣の姿で彷徨っていて、魔物と見間違えられ、殺されても文句は言えないからだ。

人型での利便性は、主に工作や交易にある。まあネコの手では物を作るなど出来ないだろう。

交易に関しては、この世界で一番数が多い種族が人間だからとっておく。人間の中で交易に用いられるのは、もちろん通貨だ。当然周りの種族たちも人間と交易するとき、人間に付き従い、通貨を使う。その通貨という風習は便利なため、この世界ではどの種族でももはや常識というレベルにまでなるほど知れ渡り、利用されている。だからだ、人化が便利なのは。通貨は人間が作ったため、当然の如く人間が使いやすいようになっている。間違ってもネコや竜に使いやすいようには作られていない。

よって獣人や竜人などの亜人は、人化を使う。

一番の理由は本能的に人間の姿が一番安全だとわかっているから……
…なのかもしれない。

ちなみに獣人や竜人たちの中には、わざと本来の姿になって暮らし
ている者もいるらしい。スリルを求めたのだろうか？

大幅に話が反れたが、普段その人化は簡単には解けないらしい。い
や、グレイス族以外では、自ら術式を解く以外では本来の姿に戻る
ことはない。無意識に自分の術式を維持することに力を使っている
からだ。

まあその『力』というのは魔力なんだけども。

だがグレイス族は、自らの身体能力を上げるために、その術式に使
っている魔力まで、戦闘に用いるのだそうだ。だから戦闘後は、力
を使い果たし、術式が解けた状態になる。よってにゃんこになった

……

く……く……く……く……く……く……

「……と。そうことは早めに言えよ。笑っ（びっくりし）ちまうだ
る？」

「……なんか不穏な言葉にびっくりと読み仮名をふりませんでした
？」

何故バレた。

「はぁ……こつちが笑われるの覚悟で言おうしたら、リョウさんが
急に真面目になっちゃったので言えなかつたんですよ……」

「あ、なんか言おうしてたのってそのことだったの?」

確かに話ぶったぎりましたねえ……。

「しかしその姿はいつ終わるんだ?」

「魔力回復を待たないといけませんから……まあ1日休めば元に戻れると……」

ほうほう(にやり)

「つまりは今日1日はネコ(その(姿なわけだね、メルトくん?)
わきわき)」

「(びくっ)……な、なんでそんなに手をわきわきとしてるんですか?そしてなんでそんな爛々とした目で見てくるんですか?」

メルトが冷や汗を流しながら、こちらを見てくる。

そりゃ……

「俺はネコが大好きなんだあああああああああ!」

目の前のネコ(メルト)を抱き上げるべく走り出す。

「いやあああああああ!」

メルトが涙目で逃げる!

ふ……この俺が逃がすとも思ってるのか？

「ハア……ハア……お、おじさんと良いことしよう！」

「いやああああああ変態く〜！」

より逃げる速度が上がるメルト。

逃がすか！光化、発・動！ 能力の無駄遣い

一瞬でメルトの前に回り込む！

「さあ……俺のターンだ……撫でて撫でて撫で上げてやるわあああああー！」

「い、いやあああああああ！？」

依頼に出て三時間程度経ったとき、ギルドに帰ってきた棕の小脇には、討伐証明部位であるポアイトの尻尾と、妙に疲れた顔をした黒猫が抱えられていたという……。

棕がすごく満足気な顔していたのは、もはや言うまでもない。

20話 ランクと実力 (3) (後書き)

あれ？主人公が変態キャラに？

つかメルトの戦闘シーンを書こうとして書けなかったよ……。

まあいいや。次話で書こう。

21話 新たなる思想（前書き）

あゝ時間が！

体育と移動教室と超恐い先生の授業があつてなかなか書けなかった作者です。

くそう…午前中に投稿するつもりだったのに……！

ふざけんな、！ 担任

ハア……フウ……どうぞ。

21話 新たなる思想

く前半は回想だヨ

あ、サブタイのサブタイは気にしないでください。

あとで私が作者をシメておくので。

……………私は一体何を言ってるんでしょうか？

まあ気にしないほうがいいですね。

私は戦闘後、ネコになり、リヨウさんに撫で回され（流石に胸の所に手が来たときは引つ掻きましたが）、疲れ（精神的に）、抱えられ、連れ帰られ、現在ギルドにいます。

ええ……………それはそれは大変でしたよ？ここまでの道のり。

まあいいです。

それより……………

「いや、それでなあ、それがまた面白かったんだよ、ラルフ」

「へえ〜そんなことがあったんですか、リョウさん」

楽しそうに人のことを話しているコイツらをどうにかしなければ。

〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

「そう言えばリョウさん。メルトさんの闘いぶり、どうだったんですか」

ふとメルトがそう聞いてきた。

最強の武族（誤字に非ず）だから、実力は申し分ないのだろうけど……

「う〜ん……。実力的にはなんの問題もないんだろうけど、如何せん闘ってるところを見てないんだよな」

そう、見てないのだ。闘いを。

正確には、見る前に終わっていたと言うのが正しいが。

「なあメルト」

「は、はい!？」

いやなんでそんなに焦ってるの？

……ん？なんか爪が出てたのは気のせいかな？

「はあ……闘うのは別にいいんだけど、闘いの後が嫌だな……」

グレイス族特有の姿になるし。

なんか、その姿になった後の展開がわかる気がする……。

まず笑われるな。確実に。

「……なんか笑われることを想像したら、ムカムカと」

ああ！なんか知らないけどムカつく！

私は、ボアイトでこのムカムカを発散することを心で誓いながら、群れの中に突入。

手前のボアイト3匹を、右足を軸にして、円心状に回り、蹴散らす。

3匹纏めて背骨が折れたらしく、3匹とも変な曲がり方をしながら、ぐったりして地面に横たわっていることから、絶命したことが窺える。

この間、約5秒。

ボアイトたちも焦っている。

私は種族の能力の恩恵で、息一つ乱さず、次の目標に狙いを定める。

仲間が殺されて怒ったのか、体して鋭くない牙をちらつかせながら、此方に特攻してくる2匹。

その2匹の首を掴み、他のボアイトに向かって思い切り投げつける。
今投げつけたので3匹巻き込まれ、計5匹減った。

残り2匹。

一瞬で仲間が殺されて、恐ろしくなったのか、私に背を向けて逃げ始めるボアイトたち。

私は木を使い、空中に躍り出て、爪を振り下ろし、2匹を切り裂きながら着地する。

これで終了だ。

「ふう……終わったけど……」

ボウン……。

滑稽な音を出しながら、物の見事にグレイス族特有の姿に変わってしまった。

「はぁ……どうしようかな……」

この後の展開を想像し、対策を練る。

とりあえず、少しでも私としての威厳（おごり）を保つため、ボアイトの骸の上に立つ。

そうしたら丁度リョウさんが来て……。

「……」

「……という感じですか」

「ほ、そんな感じだったのか」。

「しかしあれだな、うん」

「そうですね、あれですね」

「えっと、あれとは……？」

俺とラルフの抽象的な言い方に、メルトが戸惑う。

俺とラルフは、口を揃えてこう言ってやる。

「「「実力がCランクに収まってない（です）（ね）」「」「」

っていつの間に来やがったラグネスさん。

「「「いつのランク、どのくらいになりそうだ？」

「「「そうだねえ……Aに近いBランクくらいかな？」

ラグネスさんがそう言う。

「ん？そんなもんなのか？Aの上位くらいにランクインすると思っ

「てただけど……」

動きとか闘い方を見る……というか聞く限り。

「いや、実力的には、それこそ君に（他の者に比べて）一番近いと思うよ？ただ……ねえ？戦闘後に姿が小型の動物になってしまふのはねえ……かなり多大なリスクだよ？」

え？マジで？

「なんでさ？」

「だって、例えば魔物が蔓延る森に1人で討伐依頼なんかで行ったとき、戦闘後に小動物になってみなよ。ろくに戦えない体でどう魔物を撃退するんだい？」

あ………。

ネコモードのメルトは、本来とても素早く、強いはずなのに、俺から逃げきれず、捕まったあとも大した抵抗もできずに撫で回されていた。

それでは魔物を倒すなんてもってのほか。どのようにして逃げるかが最優先事項になる。

「うん。じゃあどうすりゃメルトはランクアップするんだ？」

「ちょ、リヨウさん！？別に私はランクアップなんてどうでも……」

今まで喋らなかつたのに急に喋つたな。

「いや、お前、ランクアップしたほうが色々と便利だと思うが？Aランクに絡みにくるやつなんていないこと、俺で証明されて……さ
れて……………」

自らの傷を抉ってしまった……。

「あゝわかりました！私もランクアップ出来るよう頑張りますので
！」

おお、わかってくれたか。

「んじゃそうしようか。で、どうするんだラグネスさん」

速攻で立ち直り、ラグネスさんに問う。

メルトがなんか言ってるけど気にしない。

「うゝん、やはりその姿が変わるってのを直さないとどうにもねえ
……………」

やっぱりか。しかしどうしたら直るんだろうか？

「メルトさん……………だっけ？彼女は種族の特性上、人型維持の力までも戦闘に仕様しているんだってね？それはたぶん、魔力制御の甘さに問題があるんだと思うよ。もともと魔力資質が高いせいでそのままで苦労しなかつたらしいけどね。しかも種族レベルで魔力制御が苦手だから先人が知恵を働かせて、戦闘に生かすようにしたんだろう。結果あの姿だけ。だから人型維持に回す力をしっかりと残しながらその他の魔力を戦闘に回せば、少し力は落ちるけど十分闘うこと

は出来ると思う。まあ特性上、魔力制御を克服するのは至難だろうけど……」

確かに大変そうだな……。

でも……。

「メルトとの共闘は面白そうだなあ……」

「っ！？」

どちらもスピード重視の超速バトルが出来るな……。

ん？なんかメルトの目にやる気の炎が……。

「やります！」

「うおっ！？」

いきなりどうした！？

「頑張つて魔力制御修得してやりますよ、ええ！」

「あ、ああ。是非とも頑張ってくれ。こちらとしてもAランカーが増えるのは好ましいからね」

ラグネスさんがメルトの豹変に戸惑いながらも、そう返す。

「よしっ！やるぞ〜！」

一体メルトの中でなんの革命が起きたのだろうか。

この後のメルトのテンションは異様だった……。

さて、明日からメルトの修行開始だ。

21話 新たなる思想（後書き）

あゝ疲れた。

やっと更新出来たぜ……。

なにやらメルトに革命が起きた回でした。

ご意見要望ご感想お待ちしてます。

誤字脱字報告もあればお願いします。

22話 克服の修行、開始(前書き)

イヤッハアアアアアアア!

今のテンションならなんでも書ける気がするぜ!

楽しみやがれええええええええええ!

テンションが異様です。

22話 克服の修行、開始

「難行苦行!？」

「やほ〜。」

最近名前を漢字で表記することがなくなってきた掠だよ〜。

「……………もう気にせんぞ俺は！」

「あ?メタ発言?知るかそんなもん！」

「……………ふう、少し落ち着こう。」

さて、メルトのテンションメーターが振り切れてから数日。

俺は先日の疲れがまるで残っていないかのようなメルト（ちゃんと人間ver.）に文字通り叩き起こされ（結構痛かったことを追記しておく）、寝惚けた頭で朝食をとり、ギルドへ引きずられるように……………というか実際に引きずられながら連れていかれ、今現在ギルドの受け付け前である。

連れてこられる時、終始可哀想な奴を見る目で見られたのが、今もくつきりと脳内に浮かんでいる。

可哀想と思うなら助ける、心の中でそう叫んでいた。

声は、引きずられている最中、襟を持たれ、いい具合に首にキマッ

ていたので出せなかった。

ほんと、誰か俺を慰めてくれ。

「リョウさん！依頼、受けてきましたよ！」

まあ、なんてニコニコなのかしら。

ああ……君の綺麗な笑顔が、今は角の生えた小悪魔が悪そうなお顔を浮かべている風に見えていけないよ……。

……さつきから口調がキモいな、俺。

「……ああ」

「なんですか今の間は？」

ジト目で見ってくる。君が原因だよgirl。

「なんでもないさ。で、今日はなんの依頼を受けるんだ？」

「こんなのに見してみました」

ピラッ。

依頼書を俺に手渡してくる。

「ふうん、どれど……れ……」

緊急！太古龍・アポストロス撃退依頼！

推奨ランク：SSS～S

備考：太古の時代より生きている、もともと神に近いとされる、全長500キアル程度の龍。普段は大人しいが、何かが起こる予兆を感じると暴れるらしい。制空権を完璧に掌握しているため、普通に空中戦で挑むと確実に死ぬ。天候を自在に操ることによって、多彩な攻撃を仕掛けてくる。噂によると、太古に失われた魔法も使えるらしい。討伐法は無し、撃退法は頭に生えている角の間に、強烈な一撃（一都市を壊滅させるレベル）を与えること。そうすると、頭が冷静になり、大人しく巣に戻っていく。それでも傷を付けることは叶わない。ちなみに頭の高さは地上から約300キアル。

……………（プチッ）

「出来るかあああああ！」

ビリビリビリ！

依頼書を引き裂く。

「嘘ですよ。本当の依頼はこっちです」

そう言いながら指先で一枚の依頼書を掴み、ヒラヒラしている。

そこはかとなくムカつく。

「手の込んだイタズラをするなあ〜！」

「アハハハ！すいません！」

笑いながら逃げるメルト。

「待てコラアアアア！」

ドドドドド……。

それを全速力で追いかける。本気で怒ってはいないから、光化は使わないけど。

そうして、俺たちは外へ飛び出して行った。

「はあ……本当に大丈夫なんでしょうか……」

ラルフがそう呟く。

そう、だってメルトが受注したのは……。

冰山龍・アイクシルフィーラ討伐

推奨ランク：S〜A

備考：ここウインタルから北西に150キアルス進んだ、寒冷地帯にある、極寒の冰山・ウエザスノート山に住み着いている。体長60キアルほどの龍。鋭い牙、硬い鱗に覆われた尻尾などで攻撃してくるほか、冰雪系の魔法を使用してくる。体格を利用し、体当たりをしてきたり、地中に潜って不意打ちしてくることもある。対処法としては、常に探査魔法を使用し続けるのが得策。魔法抗体を持つ

「それより、これマジで受けるのか？嘘とかじゃなくて」

「はい、マジですよ（ニコッ）」

だからなんでそんなに嬉しそうなんよ？

「だって……龍とかかっこいいじゃないですか！」

アホや、この子……。

つか自然すぎて危うく心を読んだのをスルーしかけた。

「つかこれ本当にいけるのか？推奨ランクS〜Aだし……。魔法も効きにくいし、切断系統の武器も効かん。唯一の有効は打撃武器だつて？持ってねえっつの」

さすがに今から着の身着のままで行くことはできないな。装備を整えないと。

「メルト、道具屋と武器・防具屋行くぞ」

「あ、はい」

若干トリップしていたが、無事戻ってきたらしい。

よし、行くか。

まずは道具屋に向かって歩き出した。

く3分後

超近かった。

早速買い物。

カウンターにヒョロい40代くらいのおっさんがいるので、話しかける。

「あの、氷山行くときに必要なもん、全種類揃えて売ってください」
金貨がじゃらじゃら入った袋をカウンターに置きながら言う。伊達に依頼受けてませんよ。暇があればちよくちよく受けてたしね。

店主の顔が引き吊ってる。

「わ、わかりました。少々お待ちください」

それでも仕事はちゃんとこなしてくれる。流石だと思う。初対面だけど。

「お待たせいたしました」

お、早い。

うわ〜色んなものがあるなあ……。

『追って記述します！by作者』

「ありがとうございます。いくらですか？」

「ちょっとねくらい……」

そう言って、指を1本立てる。

「なんだ金貨10枚でいいんですか？」

そうと決めれば、この袋を……。

「あ、ああ違います！金貨10枚なんて恐れ多い！金貨1枚でございます！」

「ああそんな少なくていいんですか？」

言いつつ1枚取り出す。

「はい、どござ」

「あ、ありがとうございます……」

なんかぼけ々としてたけど大丈夫かな？

「さあ次に行こうか、メルト」

「はーいー！」

いい返事だ。

次に目指すは武器と防具を置いている店だ。

「すいませ〜ん！」

呼び掛ける。

「あいよ、なんだい？」

店の奥からふくよかな体つきのおばさんが……。

早速要件を言う。

「氷山用の装備一式と打撃系統の武器を下さい」

ドサリと金貨入りの袋をカウンターに置く。

「……ちよいと待つてな。今見繕ってくる」

そう言っつて、店の奥に引っ込む。

どんなのが出てくるんだろうか……。

そんなことを考えながら待つこと数分。

おばさんが出てきた。

「これなんかどうだい？」

そう言って差し出してきたのは、厚手の黒いコートと、氷山で滑らないよう底がギザギザになったブーツ、そして、一対の打撃武器らしきものだった。不思議な形状をしたそれは、斧のような形をしながら、刃の部分が全て何やら堅そうな金属でゴツゴツに固められており、その部分が持ち手のところまで来ていた。

「こっちのコートとブーツは氷山で闘いやすい仕様になっていて、防寒性と保温性抜群のものだよ。こっちの武器は、誰も使い手のない武器……素早く細かく打撃を与えることを重視してる。性能はいいんだけど、使い手を選んでね……あんた、打撃武器を使うならこいつを使ってやってくれないかい？代金は貰わないからさ。なにダメだったら持ってくればいいし、その子があんたを選んだのなら持っけてくれて構わないよ」

一気に喋られて焦ったが、ようはこいつをもらって欲しいらしいな。ありがたくちょうだいしよう。

「わかりました。代金はいくらですか？」

「コートとブーツ、合わせて金貨7枚だよ」

袋から7枚取り出し、手渡す。

「まいど、また来なよ」

「はい、わかりました」

そう言って店を出る。

「さて、全て揃ったわけだが……」

いや待てよ。

「はい！早速行きましょー！」

ずんずん進もうとするメルトの首根っこを掴む。

メルトから、女の子が出しちゃいけないような、カエルが潰れたよ
うな声がでるが気にしない。

「まだお前の装備を買ってないぞ……」

「あ……」

なんとも閉まらないスタートだった。

最初の修行で龍を相手にするのは、無理があるかもしれないが、受
注してしまったものは仕方がない。

目指すは極寒の地。

まだ行ったことのない、未知の地だ。

一体何が待っているんだろうか……。 龍です。

22話 克服の修行、開始（後書き）

な…なんか無理矢理進めすぎた……。

色々超展開だったけど、それが私クオリティーということだ。

超速で修行に入ったけど、地味に龍との闘いは長引かせるつもり。

眠いよー（涙）

ご意見要望ご感想、誤字脱字報告、お待ちしております。

23話 龍の住みし氷山（前書き）

自分の小説にはオリジナリティがあるのか疑問に思ってきた作者です。

最近は変化を求めて超展開にしてしまったので、反省。

ゆったりまったり進みたいけど、なんか龍と戦うことに。

どうしてこうなった……。

当初（三日前くらい）はこんなこと考えてなかったのに……。

やっぱ勢いで書くのはダメだな。

真似したら皆も私みたいになつまらない小説作っちゃうよ……はあ……。

それでも勢いで書いて面白い人とかいるんだろうけどね……。

前話の用語解説入れときます。

魔法抗体：魔力抵抗の強い体質のこと。下級魔法は消滅。中級、
上級魔法は威力半減。

あと前話で手に入れた武器の補足。

片手斧を二本つつ持ち、双剣のように使う。

簡単に言えばM H 3 r dのス ッシユアッ ス(斧モード)のちっ
こいバージョンを両手に持つてるみたいな。

それでは、どつぞ。

23話 龍の住みし氷山

「寒っ!？」

「はつくしよい!」

「ういゝ掠だぜ!」

あの後、ちゃんとメルトの装備を整えて、氷山に向かっている途中なんだが……。

道のりが長いこともあって、街を出てからすでに三時間ほど経っていて、もう周りは一面雪景色である。

流石に歩いて行くことは無理なので、馬車……というかなんか変なの（ネサリ：魔物。見た目は牛と馬を足して2で割った感じ。おとなしく、攻撃性はない。力強く、重いものを引くのに役立つ）が引いている幌ほろ付きのネサリ車？を借りて乗っている。

速度的には申し分ないのだが、如何せん外は極寒なので非常に寒い。なので、幌ネサリ車？の中で生活魔法（温度調節編）を実践中。軽い魔法（こういった低級の生活魔法など）なら髪の色は変わらない。まあどうでもいいが。

とりあえず、幌の中は超快適……のはずなのにくしゃみが出た。

仕様か？

極寒の地に来ると、必ずといっていいほどくしゃみが出るあれ。

「リヨウさん、大丈夫ですか？」

おっとメルトに心配をかけたみたいだな。

「すまんすまん、大丈夫だ」

元気なことをアピール。

「そうですね、それならいいんですけど」

ホッと安堵するメルト。

優しいやつだ。

「心配してくれてありがとな」

頭をガシガシと撫で付ける。

「くっつ！／／もう！私は大人だって言ってるでしょう！／／／
／／」

そうは言ってもなあ……。

「見た目俺と同じかそれより下ぐらいだし」

「だっかっらっ！」

「ハハハ、そう怒るなって」

外は寒くても、幌の中は暖かい雰囲気（実際暖かいけど）に包まれていた。

）・）・）・）・）・）・）・）・）・）

これがウエザスノート山か……。

目の前にそびえ立つのは、大雪原に忽然と姿を現した、圧倒的存在感を醸し出す冰山。

あれから一時間程度で到着した。

「はい、ただ今ウエザスノート山の麓から中継しております」

「一体誰に言ってるんですか……。ていうか中継ってなんなんですか？」

気にしない。気にしたら負けだ。

「凄い荘厳な景色だな……」

「無視ですか、そうですか」

ん？メルトがなんか言ってるって？知らんな。

だが荘厳な景色というのは本当。

一面真っ白な大地に、威風堂々と構えている薄く蒼架かった氷の山。その周りを取り囲む、薄白い、寒冷地特有の澄んだ空気。

舞い上がる粉雪が光を反射し、銀色に輝く光景。

それらがなんとも言えないコントラストを醸し出す。

「これを荘厳と言わずなんと言っ

「はあ……まあ確かに綺麗ですけど。これから龍を狩りに行くんですよ？わかってるんですか？」

そりゃ忘れちゃいねえさ。

「ほらアレだろ？イクシルなんたらってやつをぶっ倒せばいいんだろ？」

「わかってるならいいんです。ほら！いつまでも景色を見てないで、行きますよ！」

背中をぐいぐい押してくる。

「わかった。わかったから押すな。押すなって」

やっぱり締まらないスタートだった。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

今、氷山の内部にいる。

なんでも、その件の龍くだんは、氷山内に出来た洞窟くたんに潜んでいるらしい。

別に内部に住んでいることに関しちゃどうでもいい。

それよりも……。

「凄いな……」

「ええ……これは……」

洞窟内部は当然のごとく真っ暗だったので、十八番おはちの光魔法を使っ
ただけど……。

「「凄く綺麗だ（です）……」」

光魔法により、洞窟内部の氷の結晶が光を乱反射し、とても幻想的
な光景になっている。

蒼くうつすらと輝く氷たちは、光を受けて歓喜を表しているように
さえ見える……。

「もう少し見たいけど……」

「このまま観賞会してたら、永遠の眠りについちゃいますね……」

うん、凄く寒い。

あの生活魔法は、狭い密室でしか使えない。

「くそう……使い勝手が悪いな、あれ」

「仕方ないですよ……。生活魔法を作った人も、まさか氷山で使うとは考えてないでしょうし……」

因みに俺の装備は、もちろん来る前に買った黒いコートとブーツ。

もともと着ていたコートは脱いでいる。

でもどちらも黒いので、見た目は大して変わっていない。

メルトはあの後、別の武器・防具屋へ行き、フワフワ素材（何が材料かは知らん）で出来た、暖かそうな赤のロングコートを装備。

防寒性に優れ、さらに対氷雪系魔法抵抗術式を刻んであるという代物。代金、金貨8枚。地味に高かった……。

それから、デカイ鉄槌が1つ。なんか知らんけど、武器屋のおっちゃん「オマケだ、持ってきな！」と鼻の下を伸ばしながらくれたらしい。

下心丸見え……。つか女に鉄槌持たせるか？普通……。まあ別に重くないらしいからいいけど。

今のメルトは、デカイハンマーを持った猟奇的なサンタクローズにしか見えない。

ひゃー恐ろしい（棒読み）。

「とにかく、ここで立ち止まっても意味ないし、先に進むか」

「そうですね」

そう思い立ち、内部へと足を進める……。

く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く

普通、こんな暗く入り組んだ洞窟を適当に進めば、間違いなく迷うと思うだろう。

そこで俺の光魔法とメルトの探査魔法が役に立つわけだ。

生憎、俺は探査魔法を覚えていなかった。

メルトが覚えていたから良かったが。

それらを併用^{へいよう}し、まあ大丈夫なのである。

探査魔法は、敵を探すのに優れているが、果てしない砂漠で方向がわからなくなったとき、深い森で迷ったときなどに、行きたい方向を示してくれるという、応用の効く魔法だ。あまりにも遠すぎると、機能しないが。

だから出口に行きたいと思いながら、探査魔法を使っていれば、出

口へと導いてくれる。

と、いうことで、アイクシルフィーラの所在を目下探査中なんだが……。

「まだかからんのか……?」

「ええ……どこにいるんでしょう……?」

なんでかわからないが、探査魔法に引つ掛からない。

「どこか、こことは違う遠い所に行ってるのか?」

「餌でも探しに行ってるんでしょうか?」

うん

「あ

」どづしました?」

そういえば……。

「ヤツは魔法抗体持ってんじゃなかったっけ?」

「あ……そう言えばそうですね……」

一応この探査魔法は中級に属するから、完全に消されることはない
だろっけど……。

「たぶん、かなり近づかないとわからないな……」

「ええ……」

さてどうする……ッ!?

「メルト……今の聞こえたか？」

「え？なにがですか？」

どうやらメルトには聞こえなかったらしい。

だが俺の耳にははっきりと聞こえた。

何かの鳴き声が……。

「今何かの鳴き声が聞こえたんだ……」

「え!?!本当ですか!?!」

この状況で嘘をつくアホはいるのだろうか？

「ああ……。メルト、探査魔法全開にしといてくれ。このまま奥に進むぞ」

「はい!」

さて、一体なんなのだろうか……。

この後、俺たちはあるものを目にする……。
と思います。

状況的に考えて龍だ

23話 龍の住みし氷山（後書き）

なんか適當すぎた？

まあ気にしない。

ご意見要望ご感想、誤字脱字報告をよろしくお願いします。

24話 血戦 (前篇) (前書き)

禍々しいタイトルになってしまった。

どうも、お久しぶりです。

作者です。

約一カ月投稿できませんでしたね……不甲斐ないです。

これからはせめて三日に一回更新できるようにしたい。

久しぶりすぎてストーリー忘れちゃったあ……なんてことがあったら……。

もう一度読み返してネ (無責任)

ここで、なんの脈絡もないですがお知らせです。

ただいまある計画を模索中です。

たぶん、一次創作では珍しいと思われる計画です。

楽しみにしててください。

詳細は……言いません。

その時が来るまでお楽しみというところで。

あと、今回は短いです。

早く仕上げよう……仕上げよう……と思って、まったくなんにも考えてない（というか考えがない）状況で頑張りました。

とりま、コレ書いてて構想浮かんだんで、明日か明後日にはもう一話仕上がるとおもわれます。

それでは、どうぞ。

24話 血戦（前篇）

）……………Who？

今、俺達は鳴き声の聞こえた方へ潜行中だ。

先ほど聞こえてから、もう一度鳴いてくれるかと期待し耳を澄ませ
ていたが、生憎と鳴いてくれなかった。

探查魔法もほとんど意味がないし、声も聞こえてこないの、ほぼ
勘で突き進んでいる。

はっきり言ってキツイ。方向わからん。

「まだ探查魔法には何もかかりません……………」

「そうか……………」

こんな感じに意気消沈している。

……………が、案外すぐにヒントはやってきた。

……………ずううん……………ずううん……………

足音だ。十中八九、龍のであろう。

間違いないだろう。

はっきりと距離がわかるわけではないが、聞こえてきた方向、鳴き声と悲鳴のタイミングを考えても、襲われていると解釈していいはずだ。

私は急いでリヨウさんにそのことを伝えようとしたが、リヨウさんはすでに行動を起こしていた。

リヨウさんは、普段考えられないような真剣な顔つきで、静かに、そして素早く奥へと進む。

私も、遅れまいと付いていく。

断続的に聞こえる氷の崩れ落ちる音。龍の足音と鳴き声。そして、女性の苦しそうな悲鳴。

それらが、私とリヨウさんの焦燥を加速させる。

「……………ギリッ……………！」

リヨウさんが悔しそうに歯ぎしりをする。

この狭い洞窟、思ったように動けず、あまり急ぐことが出来ない状況が、リヨウさんの悔しさと焦りを増やす。

しかし私は何故か至って冷静だった。

確かに、早く助けなければ！と思う気持ちはある。

だが、体が急ぐ代わりに、頭が落ち着く。

私は瞬時に考え出した、今の状況を打破する方法をリョウさんに提示する。

「リョウさん、私が行ってきます」

「はあ？お前、この障害物だらけの洞窟をどうやって……………って
そういうことか」

一瞬、怪訝な顔をするも、すぐに納得のいったような顔に変わる。

リョウさんは私が言わんとすることを理解したらしい。

そう、確かに棕さんは背も高く、肩幅もそれなりに広いので、この狭い洞窟では不便な体をしている。

しかも十八番の光化魔法は、今使ったら壁に速攻で激突だ。

しかし私はどうだろう？

150キア程度の背に、グレイス族の身体能力。おまけに障害物を使った立体的な戦い方をするため、障害物がある空間は得意中の得意。

私ほど、今の状況に適した人はいないだろう。

「そういうことです。では、行ってきます」

「わかった。すぐに追いつく」

互いに力強く頷く。

そうして私は、地面を蹴り、壁から突き出る氷柱を足場に、凄まじい早さで奥へと進んでいった。

この時、このことで、今後の運命がこうも変わるとは、俺達は思ってもみなかった……。

24話 血戦 (前篇) (後書き)

ごめんなさい。

少々待たせたのにこんなに短くて。

ですが、前書きにも書いたとおり、この話のおかげで次の構想が浮かんだので、次の更新は早いと思われれます。

ご意見要望ご感想、誤字脱字報告など、お待ちしております。

25話 血戦 (後編) (前書き)

24話からPC投稿に変えました。

どうも、作者です。

最近は何故か筆が進みすぎる。

なかなか終わらない。

まあ私のタイピングが遅いせいもあるけどね！

さて、今回の話は新キャラ登場の予感！？

とりま波乱万丈は回と言っておきましょう。

自分的には渾身の作です。

どうぞ、お楽しみください。

どうしてこうなったのだろう……。

私はただ……話を……。

私、アウルテルス・ティレミティアは氷山の洞窟に住んでいるという龍、アイクシルフィーラを調査しに来た。

竜人達の国、アルテミア王国国王である龍王様の命で、ある目的のため、可能ならば自身の国に来てもらえるよう説得するために。

私は俗に、『竜人』と呼ばれる種族だ。その証拠に側頭部から10キア程度の角が生えている。

竜人は種族の特性上、竜、ないしは龍と対話することができる。

……まあ高位の龍になれば、私達の世界公用語を理解し使用するため、特性を使う必要がなくなるが。

そのため、説得することで、味方になってもらうこともできる。

まあ今はそんなことどうでもいい。

普段、こういった仕事は部下がやるのだが、生憎手の空いている者がいなかった。みんな目的のために出払っていたのだ。

なので私が国王から抜粋されたわけだ。

初めてやる仕事だったが、楽だろう、と思っていた。

事実、これは自分より地位が下……簡単に言えば自分より弱い者たちが担当する仕事。地位の順列が強さ順で決められるという方針がある我が国の中で、高い位に就いている自分なら大丈夫だろう、と

いざとなれば、自身のチカラを惜しげなく使い、倒せばいいのだ。

しかし、王はその命の他に、非常に重要なげんめい敵命を下した。

『連れてくる竜（龍）を傷つけてはならない』

私は、多少驚きはしたが、しかと拝命した。

たぶん、目的のために傷ついた竜（龍）は不要だと思われたのだろう。

そう判断した。

自分ならなんとかなるだろうと思った。

この慢心が、悲劇を生むとも知らずに。

）．．．．．）．．．．．）．．．．．）．．．．．）．．．．．）．．．．．）

そうして、私はフィネクス皇国にあるウエザスノート山にやってきた。

持って来たものは地図、食糧、防寒用魔具……と、とても龍に会うような装備ではない。

一応武器はあるが、それもちょっとした自衛用のナイフ一本。完璧に舐めていた。

私は颯爽と龍の元へ向かった。

広い空洞にいたためすぐ見つかり、私は早速話しかけた。

私達の目的、理念を丁寧に話していった。そうすればわかってくれるだろう、と。

しかし、アイクシルフィーラから返答は返ってこなかった。普通なら返事が返ってくるはずなのに。

様子がおかしい……微動だにしない。

私は、もう一度龍に話しかけようとした。

その時、突然アイクシルフィーラが叫び声をあげ、暴れだした。

目の焦点が定まっていない。明らかに錯乱さくらんしている。

なにが起こった!?

私は恐怖で後ずさりする。この装備だ。このままじゃ、大した抵抗も出来ずに殺される。

奥の手を使えばなんとかなるかもしれないが、ここは狭すぎる。この冰山はこの龍の庭、格好の的になるだけだ。

しかも、王からの敵命もある。どっちにしろ、選択肢は一つ。

私はアイクシルフィーラに背を向け、走り出した。確かにここで背を向け、敵前逃亡するのは悔しいが、竜人としての誇りと王の命令、どちらをとるかは明白だ。

だから私はいち早く逃げ切るために、なるべく狭い通路に逃げ込もうとした。少し時間を置き、様子を見るために。

だが、相手も野生の龍。

敵が逃げるのを黙って見ているはずがない。凄まじい速度で近づいてくる。

こちらからは攻撃出来ないし、仮に攻撃して良くても装備も貧弱なので、対抗することもできない。

私は何も出来ない悔しさと、何も出来らずに殺されるかもしれない恐怖に、硬直してしまった。思わず、目も反らしてしまう。

動け、動け！と足に命令を出す、返ってくる答えは震えばかり。

私は正面を見る。

アイクシルフィーラは、すぐそこまで迫って来ていた。

ヤバイ！

そう脳が思い立つ前に、体は悲鳴とともに横に投げ出されていた。

反射的に体が動いてくれたのだろう。

その横を轟音とともにアイクシルフィーラが通りすぎてゆく。

肌が湧き立つのを感じた。冷や汗も、まるで止まることを知らないように流れ出る。

一瞬安堵したが、脅威はまだそこにいる。簡単には終わるはずがない。

私は悲鳴を上げながら逃げ回る。

いくら自分の強さに自信があつたとしても、私だって女だし、まだ生まれて数十年（人間に換算すると十数年）だ。いっぱしの恐怖心くらい持っている。意思とは関係なく悲鳴をあげてしまうのは仕方ないだろう。

最初こそ、なんとか紙一重でよけていられたが、恐怖により、体力の減りが著しく、すぐにほとんど動けないような状態になってしまう。私は壁際にへたり込んだ。

最後によけてから、勢い余って若干遠くまで行っていたアイクシルフィーラは、鎌首を持ち上げこちらを睨む。すでに動けないことを悟ったのだろうか、低い唸り声を出しながら、一歩……また一歩……とゆっくり近づいてくる。

遂には悲鳴も出なくなってしまった。

今、私の顔は酷く青褪めていることだろう。

「もう……終わりなのかな……？」

最後かもしれないのに、口を衝いて出た言葉はそれだった。

相手は目の前まで迫っている。

私は来る痛みに備え、目を固く閉じる。

その時、風を感じた。

同時に岩を殴りつけたような轟音が響いた。

私はうつすらと目を開く。

「……ッ！大丈夫ですかっ!？」

そこには、背の低い女の子が巨大な鎚を振りぬいた状態で立っていた。

若干後ずさりしているイクシルフィーラの短い角の片方が折れている。

どう考えても彼女がやったのだろう。

衝撃が強かったのか、相手は頭を左右に振っている。

「どこか痛いんですか!？」

驚きにより黙っていたのを、痛みでしゃべれないと判断させてしまったらしい。

「い……いや、なんともないよう……」

私は震える声で返事をする。変な返事をしてしまったのは仕方ないだろう。

「そうですか……」

彼女は一瞬安心した笑みを浮かべると、真剣な顔つきでイクシルフィーラを見据える。

相手も衝撃から回復したのか、再度低い唸り声を出しながら威嚇する。

私はその姿に恐怖していると、少女はこちらを振り向き、

「大丈夫です。私に任せてください」

と言って笑顔を見せた。

そして言うや否や、仰々しい巨大な鎚を軽々しく構え、壁を蹴って空中に跳んだ。

しかし空中では身動きが取れないので、格好の的になってしまうと思ったが、彼女は初級の氷魔法で順次、壁から足場を作り、四方八方に動き回る。

相手は、良いように攪乱かくらんされているようだった。

彼女は混乱している相手の隙を上手く衝いて攻撃し、傷を負わせてゆく。

だが、傷つくのは固い鱗の表層ばかりで、なかなか突破口を開けない。

しかも敵だって黙ってやられるわけがない。

捕えられないならと無差別に口から氷弾を放ってゆく。

私はこの戦いを茫然と見ていたが、ふと一発の氷弾がこちらへ向かってきているのに気づく。

少女も気づいたようで何か叫んでいるが、私には聞き取れなかった。

氷弾がゆっくりと、まるで世界の時間の進みが遅くなったかの如く

近づいてくるように見えた。

しかしそれも束の間の事。

私は誰かに抱きかかえられ、その場を離れていた。

私の居た場所に氷弾が落ちた。砕けた氷が埃のように舞い上がる。

「ふう〜、あぶねえあぶねえ。大丈夫か？」

頭上からそんな声が降ってきた。

上を見ると、優しい笑顔を見せる、黒髪の青年の端正な顔があった。

「えっ？う、うん……／＼／」

私は気恥ずかしくなり、俯きながら返事をする。何せ今の状況は、お姫様だっこ&間近に顔である。

「よし、大丈夫ならいいや！とりあえず、あの龍ぶっ倒してくるからここで待ってるよ？」

そう言つて、お姫様だっこのまま氷柱の陰に連れて行かれ、そつと下ろされる。

「危ないからこっから出んなよ？」

そう釘を刺して、歩いて行く。

「さて、この子を怖い目に遭わせた罪は重いぜ？」

そう青年が言ったら、突然彼を中心にとんでもない魔力が渦巻く。

黒かった髪の色がきれいな白銀に変わっていく。

私は、その神秘的な光景に見惚れてしまった。

彼はスタスタと敵に歩み寄る。

空中から少女が舞い降りてきて、何かを話していた。

たぶん二人は知り合いなのだろう、互いに笑みを浮かべながら話しつつ敵を睨みつけている。

話し終わったのだろうか、二人はニヤリと笑いながら同時に左右に跳びあがり、壁から突き出た氷柱の上に立って武器を取った。

少女は言わずもがな、青年のほうは無骨な双剣のようなものを構える。

「さあ、狩りの時間だ」

やけに、青年の声がきれいに聞こえてきた。

く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く

「さあ、この子を怖がらせた罪は重いぜ？」

俺は、はっきり言つと怒っていた。

やつに襲われていた子。その子は涙目だった。顔も青褪めていた。相当怖かったことが窺える。

怒る理由はそれで十分だ。

俺は歩きながら《魔力最大》と《身体能力強化》を発動。

髪が白銀に変わる。

それからさっさとイクシルなんたらのところへ足を進める。

「リヨウさん」

メルトが俺の横に降りてきた。

「おう、お疲れ。早速で悪いがアイツぶっ飛ばすぞ」

「ハハハ……まあ仕方ないですね」

少し苦笑しながらメルトは言う。

「ああ、奴は女の子を泣かせやがったんだぜ？」

俺は芝居がかった仕草でメルトに言った。

「似合ってますんよ」

笑われた。もちろんこっちも本気で芝居っぽくしてるわけじゃないが。

「ま、どうでもいいからさっさと終わらせてあの子を送り届けよう」

「はい！」

俺達は互いに笑みを浮かべながら、地面を蹴って壁から突き出た氷柱の上に乗る。

一瞬、目を合わせてうなずき合い、武器を構える。

攻撃開始だ。

先行は俺。こつこつ鱗や甲殻を持ったやつは大概、関節とか腹とかが弱点だ。だから狙い目はそこ。

俺はやつの右後ろ足の付け根に狙いを定め、氷柱から一気に飛び降りる。

そして、両手に構えた両手斧鎚（仮）を平行に構え、関節に叩きつける！

バキャンッ！

盛大な音を出し、関節を覆っていた鱗が割れた。

予想通り、関節部分は柔らかいようだ。

俺は龍の甲殻に足をかけ、再度空中に躍り出る。

そして近くにあった氷柱の上に。

メルトの方を見ると、飛び降りたところから絶妙なタイミングで鎚を振り下ろす瞬間だった。

メルトが狙ったのは左の前足。

やはり関節を狙い、龍を容赦なく痛めつけていた。

相手は苦悶の声を上げる。

だが、相手に暇を与えるつもりはない。

俺は同じように右前足の関節を砕いた。

メルトも同様に。

やつは痛みには耐えきれずに倒れた。

そこで俺の最後の一撃。

俺は腰のベルトに両手斧鎚（仮）をしまい、手刀を作る。

すると、そこから光の剣のようなものが一メートル前後に伸びた。
それを正眼に構え、切りかかる。

「っらああ！」

ザンツッ！

光速で振り下ろされた剣は、龍の首を輪切りにした。

「ふう〜終わったな」

俺はメルトの方を振り向く。そこには……

「はい……」

黒ネコちゃんがいた。

「あゝ、まあ、ほら！今日は克服修行の最初の依頼だったんだから。
いきなり直るもんじゃないし、これから直してけばいいんだよ」

全力でフォロー。

「まあ………そうですね。これから頑張って克服します」

明るい表情に変わったメルト。たぶん、この調子ならすぐに克服出来る……と信じてる。

「さて、女の子んどこに戻るか」

「はい」

歩いて、さっき助けた子のところへ行く。

「よう、ちゃんと隠れてたか？」

「普通はもつと別の心配するんじゃないですか？」

呆れ顔で俺を見てくるメルト。猫ver.で見られても可愛いだけなので、なんとも思わない。

「んじゃ、とりあえず自己紹介しとくか」

メルトがジト目で見てくるが、無視。

「俺はリヨウ・カガリビ。Aランクの冒険者だ。旅をしてる」

「私はメルト・ライエンスです。職業は冒険者兼旅人。Cランクです」

無難な自己紹介をする。

「私はアウルテルス・ティレミティアっていうよ！よろしく、私の旦那さま！とメルトちゃん！」

「.....は？」

俺とメルトの間抜けな声が、洞窟に響いた。

25話 血戦 (後編) (後書き)

初めて主人公達がいる国の名前が明かされましたね。

龍があっさりしすぎたかなあ……。

なんか今回は色々ハツチャけちゃいました。

ですが渾身の作でございました。

楽しんでいただけたら幸いです。

ご意見要望ご感想、誤字脱字報告があればよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8875u/>

白銀、光臨(あらわる)

2011年10月17日02時42分発行